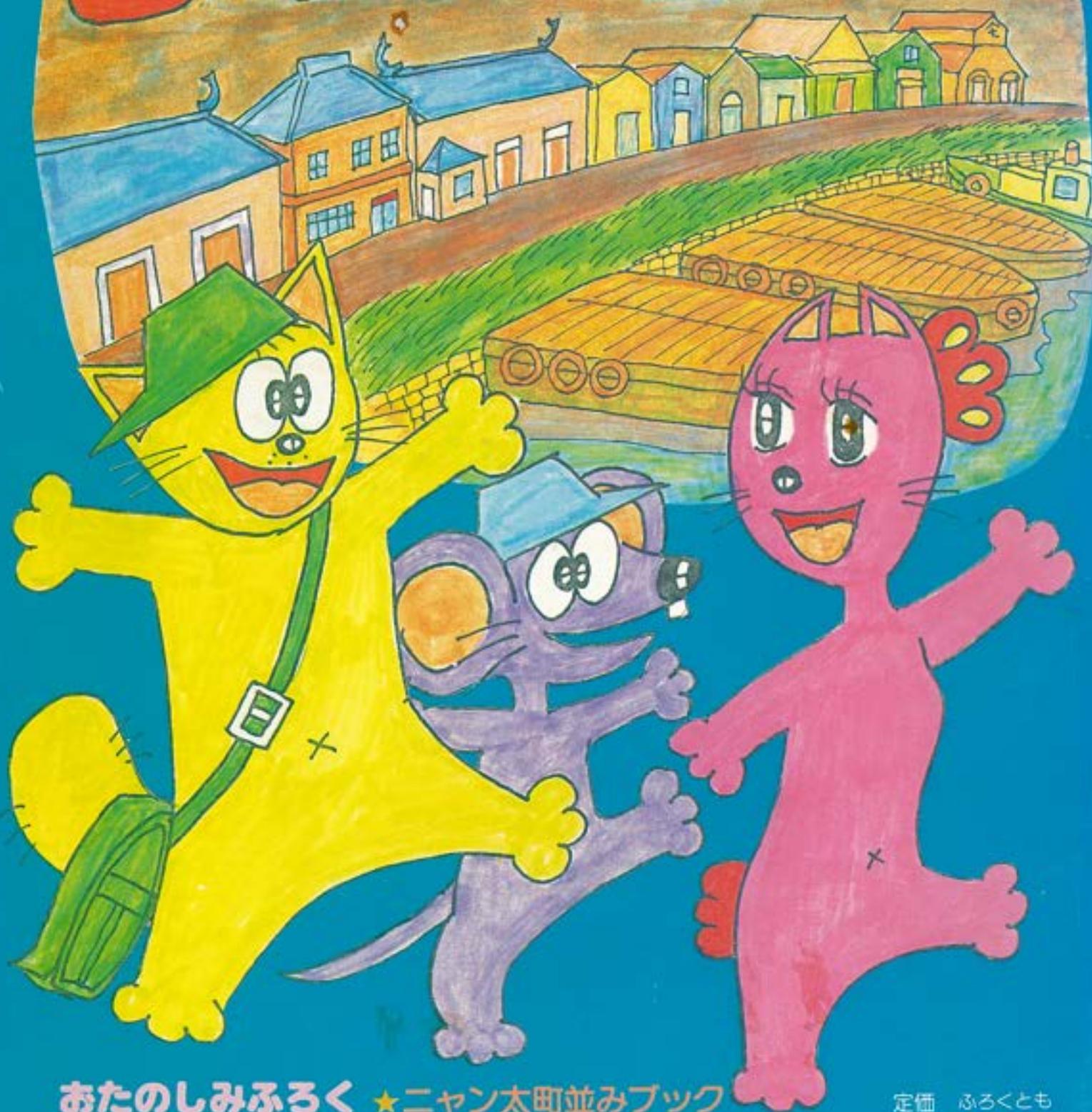


夢・希望・愛・そして運河

紙芝居の本

ニャン太は運河が大好き



おたのしみふろく ★ニャン太町並みブック
★ニャン太めりえ貯金箱

定価 ふろくとも

¥400



▲ワン助

紙芝居に出てくる

動物たち



▲金持ちのネコぞう



▲しゃちほこおじさん



▲シーガル君



▲チュー三郎



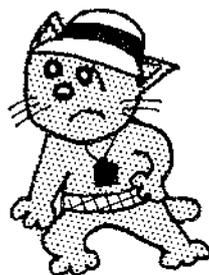
▲ニヤン太



▲ミヤー子さん



▲ニヤンパイ



▲トラ次郎



▲さくらちゃん



▲ミケ作

もくじ

- はじめまして..... 1
- 第1部「ニヤン太の大冒険」..... 2
- 第2部「ニヤン太の大恋愛」.....10
- 第3部「ニヤン太一家の大活躍」...16
- ☆ニヤン太町並みマップ.....24
- ◎小樽運河と石造倉庫群.....26
- ♥運河を守ろう！紙芝居.....30
- みなさんへ.....32

ニヤン太豆辞典

この紙芝居をよむのに、参考になることや、運河に関係のあることがら12個を、できるだけ、わかりやすく解説しました。

- ふるく**
- ①ニヤン太町並みブック
 - ②ニヤン太ぬりえちよ金箱



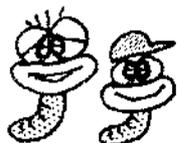
▲ニヤン坊



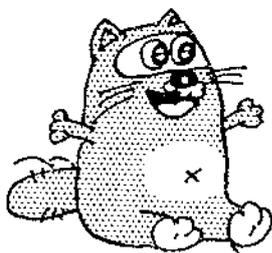
▲ペケちゃん



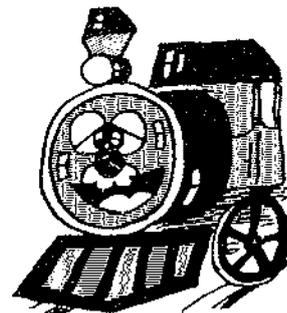
▲ゲロ吉



▲毛虫の親子



▲たぬきのおじいさん



▲機関車のおじいさん



昭和56年10月25日田雪のち雨のちくもりのち晴れ

おごるまごん

みなさん、はじめまして。
 ぼくらは、運河を守ろうと、小樽の町のあちこちで、紙芝居を上演している紙芝居チームです。
 みなさんは、自分たちの住んでいる、この小樽の町のことを、よく知っていますか？

あながい、自分の町のことは、知らないことが多いものです。

ぼくらは、「小樽運河を守る」住民運動をはじめのまでは、あまりよく小樽の町のことを知りませんでした。

小樽は、昔はたいへん栄えた、港町だったのですが、今は、ずいぶんと、すたれているのです。

ところが、小樽運河は、全国の人たちから注目されています。

今や、小樽運河は、小樽のシンボルといわれているのです。

この紙芝居の本をつうじて、小樽の町の将来や、運河に、どんなことがおころうとしているのか、みなさんも、よく知って、考えてみて下さい。

そして、町のかたすみで、紙芝居をやっているぼくたちを見つけたら、声をかけて下さい。

紙芝居チーム

紙芝居チーム

その1

チビッコたちの声えんをうけ、「移動紙芝居」というノボリをたてて町の中をゆく、紙芝居チームのメンバーを紹介しましょう。



- ①あだ名
- ②とし
- ③仕事さき
- ④出身地



中 一夫
 ①たるみ
 ②25
 ③紙芝居店
 ④小樽



松岡 勤
 ①はだかぼう
 ②25才
 ③紙芝居店
 ④小樽



斉藤友美恵
 ①はだかぼう
 ②25才
 ③紙芝居店
 ④小樽



塚本由佳
 ①ゆかりちゃん
 ②21才
 ③紙芝居店
 ④小樽



北村哲男
 ①文利さん
 ②32才
 ③紙芝居店
 ④小樽



庄部泰代
 ①やすへえ
 ②ないしよ
 ③そは足敷半
 ④大分県

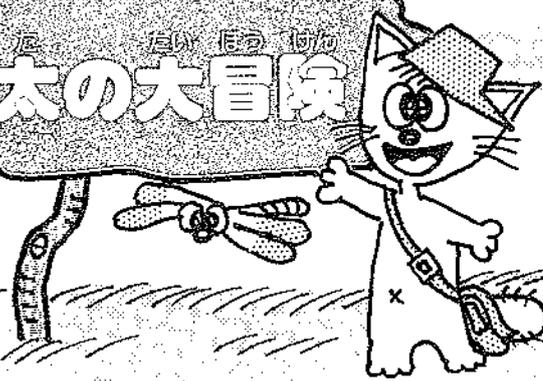
原作 松岡つとむ
原画 なかかずお

第1部
ニャン太の大冒険の
はじまりはじまり

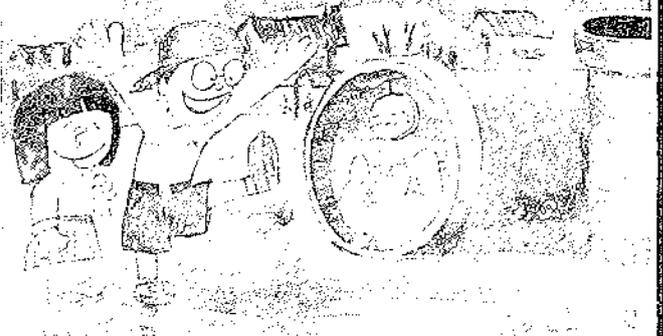
ZZZ

第1部 ニャン太の大冒険

紙芝居だよ！
おもしろいよ！



ニャン太の大冒険

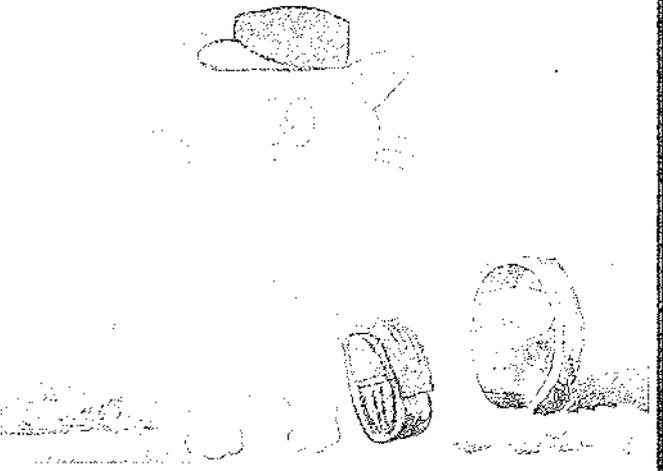


子ネコのニャン太は、空地の下カンの中に住んでいます。

ニャン太は、ドカンの中から町の空をながめながら、いつも思っていました。「いったい、この町はどんな町なんだろっ。」

遊びに来た子どもたちは、ニャン太に山の話や海の話、機関車の話や船の話をしました。

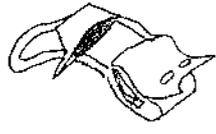
ますますニャン太は外へ出たくなりました。



そうしているうち、子ネコのニャン太も一人前のネコになりました。

そして、ニャン太は、入て町を探索に出かけることになりました。実は、この町のためニャン太は、靴子とカバンをひろつて来たのです。

その靴子をかぶって、カバンをかけるので、ニャン太はいつでも探検家になりました。

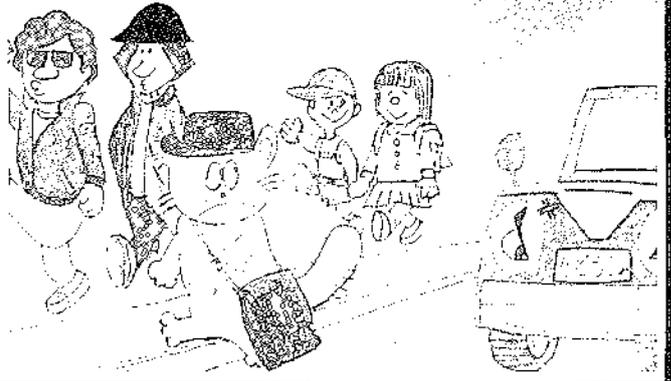


ある日ニャン太は町へ出ました。町へ出ると、道端をいばりながら走るモノがいました。

「フー、フー。」
と、うるさい音を出しながら走っていきます。

中には、ずいぶんスピードを出しながら走っている自動車もあります。ニャン太は思いました。

「あんなやつがいると安心して道を歩けないな。それになんたい、あいつときたら、白いガスばかりをはいてオレたちのすう空気がよこれしてしまうじゃないか。エーツ、ゴホツゴホツ。生まれたばかりなのに死んでなるものかい。」
と思いました。





ニャン太は、自動車に気をつけながら
ずいぶんと歩きました。
そして、この町に坂が多いのに気がつ
きました。ニャン太は、たいらな道を歩
くよりも坂道を歩くほうが好きでした。
ニャン太は元氣よく坂を上ります。
「この坂を上ると何があるのかな。」
ニャン太はいつもそう思いながら上り
ました。そう思うと、苦しさよりもニヤ
ン太は楽しさでいっぱいでした。
坂を上ると、道は左右に広がっていた
り、ふりかえると、海に向かって道がつ
づいています。
その上、さらに、坂の道がつづいてい
る所さえありました。



ニャン太はその坂道をさらに上って行
きました。
その道は林につづいていきました。
「おや、この町は少し歩くと林がある
ぞ。
こんな町の近くに草や木の緑があるな
らって。
ホラ！
虫さんや鳥さんたちが、いっぱい遊ん
でいるぞ。
オーイ、虫さん、鳥さん、ボクも仲間
に入れて下さい。」

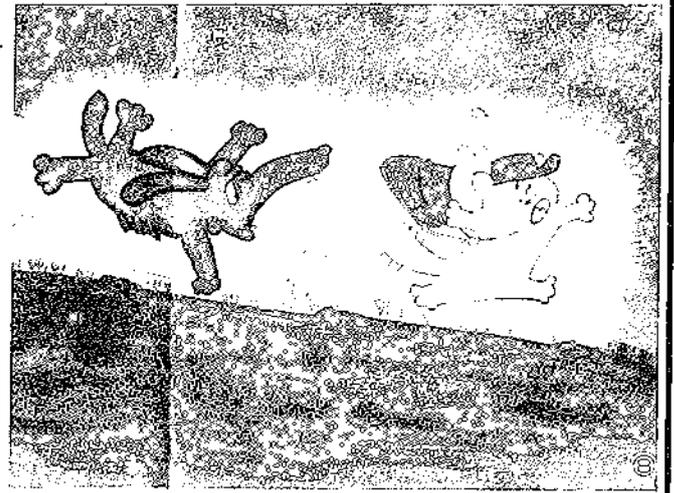


みんなといっしょに遊んだあと、この
林の中で、一番の年寄りて物知りのタヌ
キじいさんは、ニャン太に話がつて言
いました。
「この林はのう、昔、人間が捨ててく
れたんじや。あかでのう、今じゃわん
らの遊び場になつとるんじや。」
「へー、人間つて、こんな自然をつ
くつたりもするのう、自動車みたいなこ
わい車物はかりをつくつているわけじゃ
ないんだな。」
とニャン太は思いました。



ニャン太は、林の仲間たちに別れをつ
けて、林の中をつづいている道を、とん
どん進んで行きました。
ニャン太は、上の上まで上つてのまじ
だ。
「フー、すごいや、ここからだとなんか
全部見える、海が見えるぞ。
フーン、こいや、
人書や家なんかより、ずっとずっと高
いぞ。」
ニャン太は大よろこびでした。





下り坂を、ニャン太が、らくらくと人の住んでいるあたりまで帰って来た時です。

「ワンワン!! ワンワン!!」
とつぜん、ものかげから大きな犬があらわれて、ニャン太にあそいかろうとしました。

「ワーツ、たいへんだ!! だれか助けてくれエ!!」

ニャン太は一生懸命にげました。

「ワンワン!!」

「助けてくれエ、犬に食べられちゃうよ。」

「ワンワン!!」

「待てエー。」

「もつためた。助けてくれエー。」



気がついたら、ニャン太は木の上に、登っていました。

「あつ、そうだ!! ホクはもう木の上に登れるようになったんだ。」

そして、下でほえている犬に向かつて言いました。

「ワイー、お前は木には登れないだろう。くやしかつたらごまて来てみな。」

犬のワン助はとてもくやしがりでしたが、走って行ってしまいました。

ニャン太は木の上から、屋根の真ん中を見て言いました。

「あや、あんな所に、へんな建物があるぞ。」



ニャン太は、その建物をめざして行つてみることにしました。

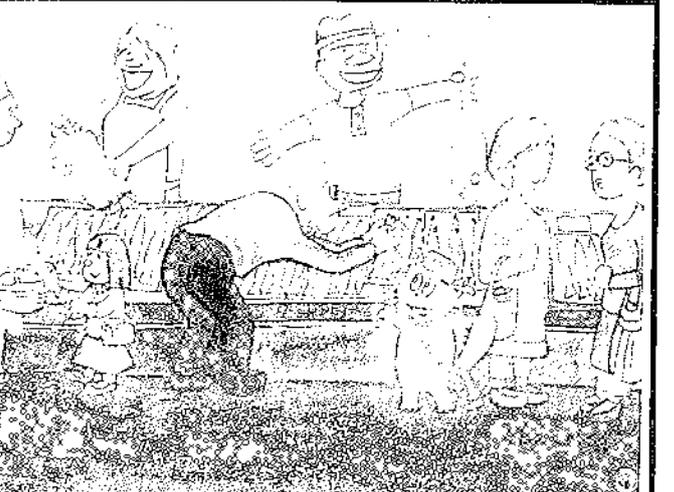
「なんておかしな形をした建物なんだろう。」

あや、屋根が空に突きつて、とがっこのぞき。

鐘割教会を見ながら、ニャン太はそう思いました。

でも、そんな建物がこの町に、にあつたような気がしました。

そしてニャン太は、この建物がとても好きになりました。



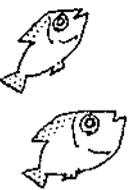
ニャン太は、さらに、探検をつづけました。

町を歩いて行くと、人がたくさん集まっている所がありました。

ニャン太の大好きな魚を、台の上に、いっぱい並べて、元気な声で話しているおじさんや、貴い物力をぶらさげたお母さんたちが集まっています。

「あや、しんせん、魚がいっぱい並んでいるぞ。」

ニャン太は、こんなふうには、ぎやかな、市場がとても好きになりました。





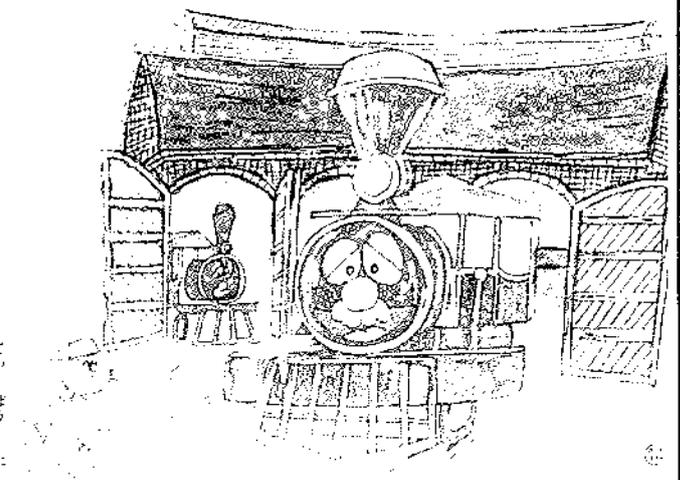
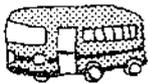
ニヤン太は、町を歩きながら、思いました。

「この町には、富岡教会みたいなおかしな形をした建物が、いっぱいあるぞ。」
ニヤン太は、コンクリートのビルディングよりも、こんな建物を好きになりました。
歩けば歩くほど、そんな建物を見るのができます。
ニヤン太はますます歩くことが好きになりました。



大きな通りになると、ニヤン太は赤と白の大きな自動車を見つけました。

「あや、あの自動車には、たくさんの人間が乗っているぞ。」
一人で乗ってる自動車をやめて、みんな、あれに乗れば、こわい自動車が少なくなるのかなア。」
と、ニヤン太は、バスを見ながらそう思いました。



ニヤン太が歩いていけると、鉄の煙が二本、道を横切っていました。ニヤン太はなんだろうと想着、行つてみることにしました。そこには、大きな大きな機関車のおじいさんがいました。

機関車のおじいさんは、ニヤン太に向かって言いました。
「わしはなり、ソウさんみだいなものだ。体もてかいし力も強い。少し前までは人間を乗せて、この町から、となりの町まで、大活躍したものだ。」

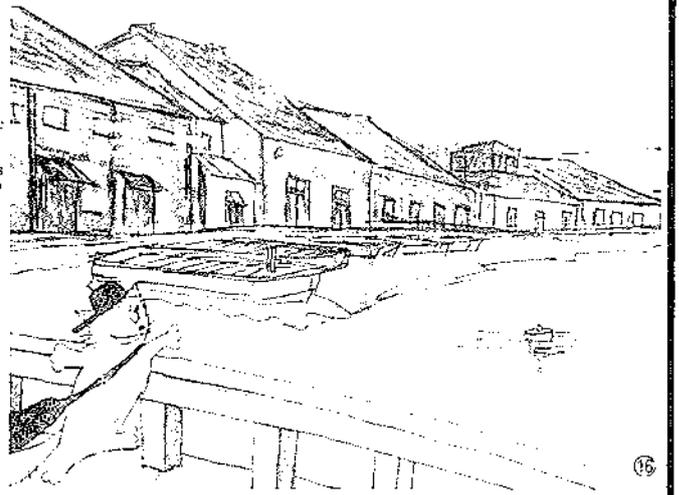
ニヤン太は、機関車のおじいさんが、走っていたころのことを想像しました。そしておじいさんの姿が、この町によくあうと思いました。
「おじいさん、元気だね。」



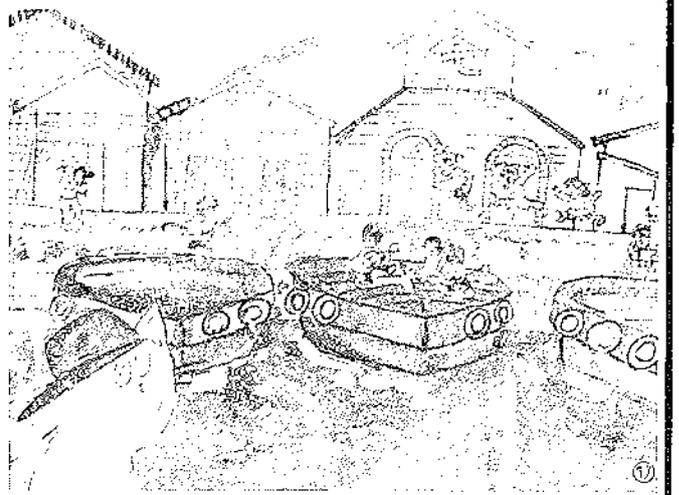
歩けば歩くほど、この町は、おもしろいぞ。」
と、ニヤン太は思いました。

ニヤン太は船へ出ました。
ニヤン太にとつては、はじめての船で、船が、うかんでいます。
「船はどこへ行くんだろう。」
ニヤン太は思いました。
「運の悪いのは、いつたい何かあるんだろう。」

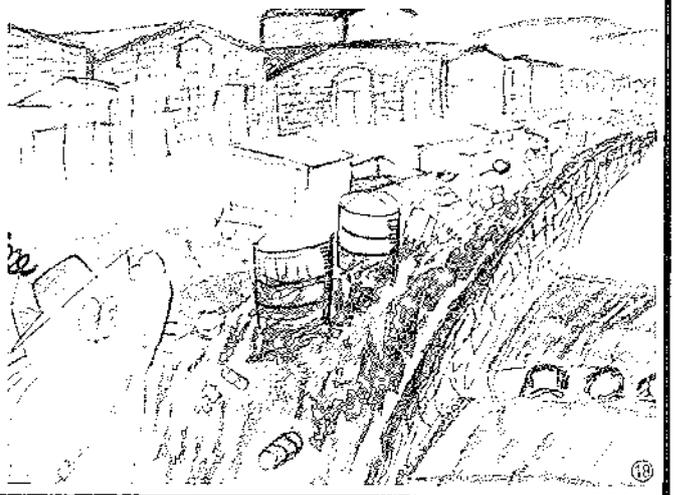
そうしているうちに、ニヤン太の船は、だんだんと楽しくなってきました。
ニヤン太の見ていた船は、赤と白の灯台に送られて、大きな港へ出て行きました。



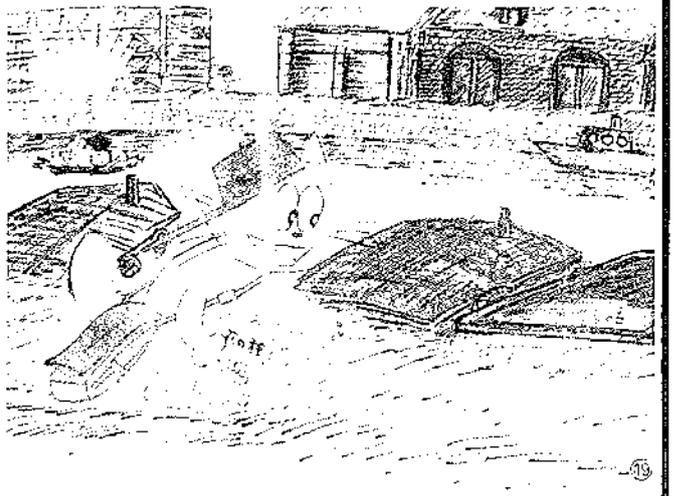
ニャン太は思いました。「この町は、山や浜やいろいろなものがある、楽しい町だ。」そうしているうちに、ニャン太は運河にきました。運河に浮かんでいる、はしけの上では、人間たちが荷物の積みおろしをしています。そのほとりに、古い大きな倉庫が並んでいます。それは石で作られた倉庫です。中にはいっぱい荷物が入っていました。「なんてがっしりして、おちついた風景なんだらう。」ニャン太は、運河のまわりが、一等の町らしい風景だ、と思いました。



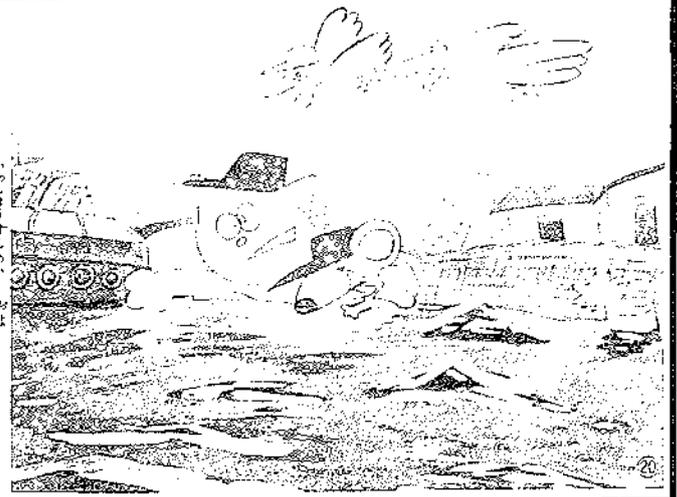
すつかり運河が好きになったニャン太は、毎日、運河へ遊びに行きました。運河べりの、しばの上で、ひるねをしたり、あきもせず、小樽の山並みをバックに、倉庫をながめてすごしました。運河のほとりに、絵をかいている人たちや、ギターを持って歌っている人たち。スポーツシャツを着て走っている人たち。カメラを持って、遠くの町からたずねて来る人たち。「ネ」のオレが好きな風景を、人間たちも好きなんだなア。」と、ニャン太は思いました。



「これだけ多くの人たちが、運河のまわりに、遊びに来ているのに、ベンチやゴミ箱が、ないのはおかしいなア。」と、ニャン太は思いました。そして、「運河のまわりに止められている自動車がなくなつて、ベンチや、花だんがきたら、どんなにすてきだらう。」と、思いました。



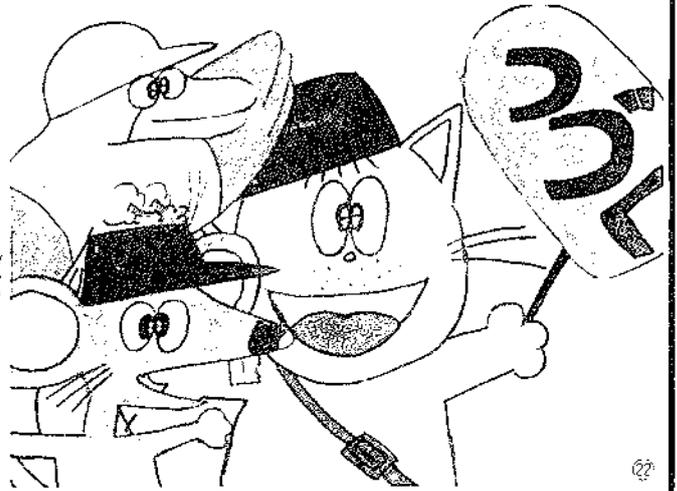
ニャン太は、とてもいい考えが思い浮かびました。そうです、運河のほとりに、花のたねをまくことにしたのでです。春になれば、きつと、きれいな花が咲くにちがひありません。そう思うとニャン太は、とつてもうれしい気持ちになり、夢中で花のたねをまきました。その時です。運河の中から、「たすけてー!!」というさけび声がかえってきました。一匹のネズミがおぼれていました。ニャン太は、「たいへんだ、早く助けなくては!!」そうさけぶと運河にとびこみました。



ニヤン太は一生懸命に泳ぎました。
 おぼれているネズミの所まで泳いでいくと、ネズミをカカえて、また、岸まで泳ぎます。
 「ネズミくん、がんばるんだよ。」
 「チューチュー、死にそうだよ。」
 ニヤン太は、ネズミくんをばげましながら、一生懸命泳ぎます。
 カモさんも飛んできて、
 「ニヤン太、がんばれ!!」
 と応援しました。
 岸辺に建ち並ぶ倉庫群も、
 「がんばれ、がんばれ、ニヤン太!!」
 と、応援しているようです。
 ニヤン太は、一生懸命に泳ぎました。



ニヤン太は、ネズミをカカえて、やつとの思いで岸辺にはい上がりました。
 「うわー、変なおいがする。こりやへドコにあいだよ。人間たちの流してきた水が、運河に流れこんで、こんな、くさいにおいがするんだよ。」
 ニヤン太は驚きました。
 「どうして人間たちは、こんなきつい水を、きれいにしようとしなんだ。」
 ニヤン太は、くさいにおいを取るために、ネズミに水をかけてあげました。
 カモさんは、ニヤン太に水をかけてあげました。
 「うわー、冷たい。だけど、くさいにおいがとれたぞ。」



ネズミは、岸で元気をとりもどすとニヤン太に向かつて言いました。
 「どうもありがとう。君のおかげで命びるいしたよ。ボクの名前はチュー二郎」と言うんだ。助けてくれたお礼に何かしだいだけどー。」
 ニヤン太は、しばらく、考えてから、
 チョー二郎に言いました。
 「そうかい、それならボクの友だちになつておくれ、チュー二郎くん。」
 ニヤン太は、友だちができて大よろこびです。

第一部 ニヤン太の大冒険

おしまい

その2



今から8年前に生まれた市民団体です。運河とそのまわりの石造倉庫群は、とても価値が高いから、埋めたりせずに、そのまま残しておきたい、と考える人たちの集まりです。

運河は、今、臨港線という道路をつくるために埋め立てられようとしています。

運河を守る会の人たちは、運河の価値を、なんとかわかってもらおうと、いろいろな運動をしています。

町に立ってビラを配ったり、署名を集めたり、市役所の人たちと話し合いをしたり、また、いろいろな行事を行ったりしてきました。

でも、まだわかってくれない人たちがいるので、毎週あつまって、どうしたら運河を残していけるか、相談をかさねています。

小樽運河を守る会

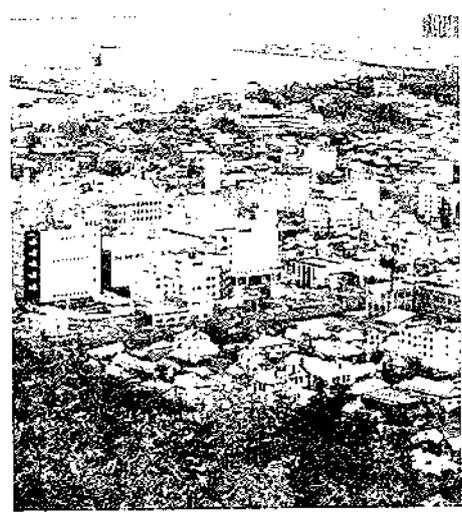


●小樽運河と石造倉庫群



み 富山 美
 ●小樽運河を守る会
 ●会長 ●65才
 ●主婦
 ●松ヶ枝町在住

第1部 ニヤン太の大冒険から
小樽の町並み・そして運河



●旭展望台からのぞむ小樽の町並み

のように考えるでしょう。うか、いつもは、そう思わないかも知れませんが、「灯台も暗し」という、ことわざがありまが、身のまわりのものの良さは、あんがい気がつかないことが多いものです。坂には、それぞれ、

さて、みなさん、第1部「ニヤン太の大冒険」を読みおわって、どんなことを感じましたか。
ニヤン太は、坂道を見て、

「この坂を上ると、何があるのかなア。」
そう考えたのでしたね。
みなさんのお家のそばには、坂道があるでしょうか。

小樽は「坂の町」

小樽では、坂はどこにでもあります。みなさんも、坂を上るとき、ニヤン太

小樽で一番長い「地獄坂」

小樽駅の近く、薩摩会館の交差点から、小樽商科大学のある、この上までつづく坂道を「地獄坂」といいます。

この坂には、警察署などが建ち並んでいたり、商店へかよう入学生方、苦しみながら登るので、このわい名前がつきました。

名前があります。たとえば「地獄坂」「船見坂」それから「だんご坂」という、おもしろい名前



●運河が完成する前の雨沢町(今の色内)

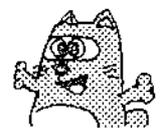
の坂もあります。小樽に坂が多いのは、海があって、山が、すぐ近くにあるからです。

もの知りのタヌキじいさんは、「この林はのう、人間が植えてくれたんじや」といってましたね。そうなんです。

小樽のまわりの山の林は、ほとんどが人間が植えた林なのです。長橋にある「苗圃」で育てた苗木を植えた林が多いのです。

小樽は「港の町」

山の緑は、目をよくしてくれませぬ。心をなごませてくれますね。



北海道で一番古い「小樽苗圃」

長橋にある「小樽苗圃」は、明治26年につくられた苗圃で、北海道で一番古い歴史をもっています。

毎年、五月ごろには、「明治の杉」や「大正の松」など、40年以上の樹齢の花を咲かせ、花見を楽しむのにぎやかならで、にぎわいます。

また、約30ヘクタールの苗圃は、今更方大きな林になっています。歩いて見ても、とても楽しいです。

でも、それだけではありません。山に木を植えたのは、港を大事にしたからなのです。

はげ山にしておくと、雨がふるたびに山の土や砂が、川を流れて、港へ流れこんでいきました。

土や砂がたまると、港は浅くなって、大きな船は港に入れなくなります。小樽は「港の町」ですから、港は大事にしてきたのです。

海も、毎日見ていると、それほど感動しなくなりますが、「海のもこころには、何があるんだろう」と考えはじめると、気持ちまで、海と同じように、広く、大きくなっています。

小樽の気候がおだやかなのも、海があ



ニヤン太豆蔵

NO.3

消えた図書館!?

多くの人たちに愛され、親しまれてきた、小樽の図書館は、昭和56年7月にとりこわされてしまいました。

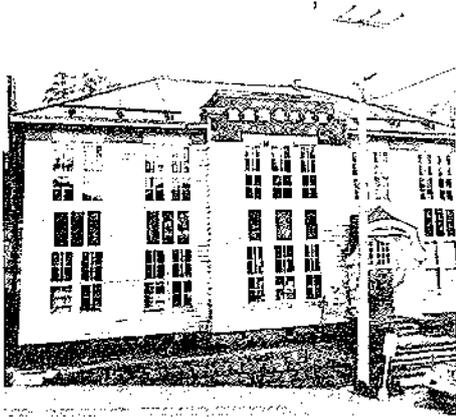
大正12年にできた図書館ですから、60年という、北海道で一番古い歴史をもった図書館でした。戦争の間は、附館していた時間もありませんでしたが、戦争が終るとまた開館し、市民が集まってベンキを塗ったり、そうじをしたりしてきれいにしたこともありました。

小林多喜二、伊藤整などの文学者もこの図書館に通ったものでした。

昭和49年には、図書館を舞台にテレビドラマが作られるなど、建物としての美しさも認められ、絵や写真の題材にもなっています。

こんなに多くの人たちに愛された図書館でしたが、「本がふえて、せまくなった」と、あっさりとりこわしてしまったのです。

もっと考えれば、残す方法もあったものを本当にもったいないことでした。



●とりこわされてしまった図書館



●三角市場の買物風景

のおかげです。海の幸も豊かですね。

安くておいしい魚がそろ

う市場が、小樽には21ヶ所もあります。

「よし、まけとくよ」という、威勢のいい声が聞かれる市場には、毎日たくさんの方が買い物に訪れます。

よい港があったおかげで、小樽は北海道のなかでも、早くから開けました。札幌に開拓使がおかれたのは明治3年のことです。

開拓のための物も、人も、みんな小樽の港へ、船でやってきました。

アメリカ人のクロフトード技師の力によって、手宮、札幌の間の、鉄道がしかれ、小樽の港は、ますますはんじょうするようになったのです。

信づくりの倉庫が、多く見られるようになったのは、明治20年ころからです。

小樽は「歴史の町」

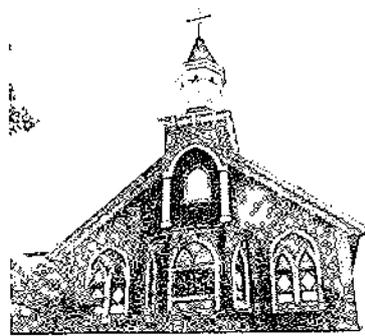
明治のおわりから大正、昭和のはじめころまで、小樽は、日本じゅうでも指おりの大都市でした。

石づくりの建物が多かったため、そのころの建物が、そのまま残されているのが、小樽の町の特徴です。

色内大通りの銀行や商店のたちならんでいるさまは、昭和のはじめころと、あまり変わっていません。

富岡教会や和光荘など、いつぶう変わった建物が、市内のあちこちにあります。

小樽の人にとっては、見なれたけしきですが、町の歴史を語ってくれる、とても大事なけしきです。



▲富岡教会

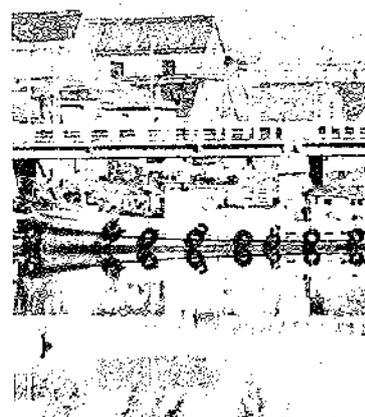
▼小樽のシンボル「運河」

そういうけしきの中でも、いちばん小樽らしいのは、

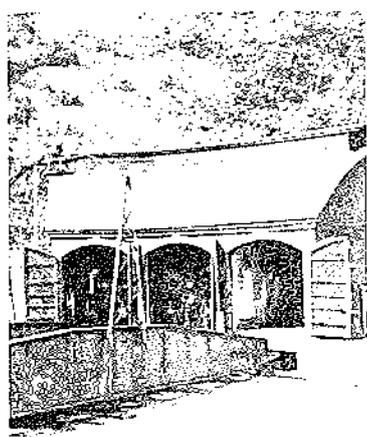
やしほの「運河」

ニヤン太は運河のけしきを、大好きになりましたね。

運河には、明治の、大正の、昭和の、そして今の小樽がぎんしりつまっていきます。この運河や、小樽の町並みを、多くの人たちが愛しているのです。



日本で一番古い「鉄道記念館」

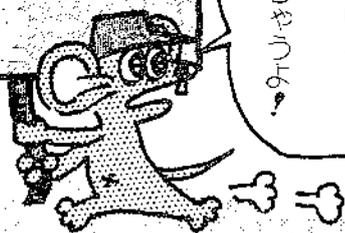


小樽に鉄道が開通して、蒸気機関車が行ったのは、明治13年のことでした。北越前の人「カ、20万人、二もかたないころて、もうろんを海まで、はじめての鉄道でした。日本では一番古いです。鉄道が開通してから、小樽の町は、大きく発展したのです。

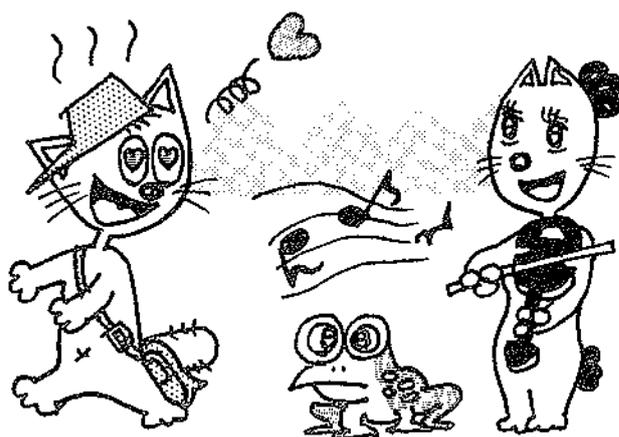
手宮公園の下にある「鉄道記念館」は、明治18年に建てられたもので、日本でもつとま古い歴史をもった鉄道施設です。昭和33年には、鉄道記念館三行を記念して「鉄道の日」として、この駅で、あそびがなされました。

第2部
ニャン太の
大恋愛

原作 松崎つとむ
原画 なかかずお



「あーい、ニャン太、
はやくしないと
第2部が
はじまっちゃうよ。」



ニャン太の大恋愛



「あーいニャン太、第2部のはじまりだぞ。」
「まがしとけよ。」
第2部のはじまりはじまり、ニャン太の大恋愛。運河が、好きになったニャン太は、子コロと部と、毎日、運河へ遊びに行きます。運河にはキワーをひいて歌っている人たちが船をカいている人たち、もちろん、はしけの上で荷物のつまあろしをしているあじさんたち、ほかにも、ネコヤカメたちが遊びに来ました。急流の屋根の上では、シヤチホコおじさんが、そんな人たちを監視しています。

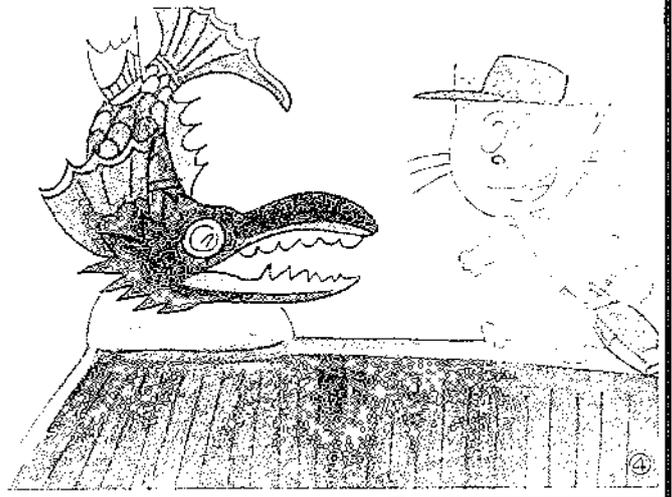


ある日、ニャン太は、シヤチホコおじさんの所に遊びに行きました。シヤチホコおじさんは、ニャン太に、運河や急流の事故、この世界のあじさんたちの話をしました。
「へえ、運河ってこんなところさ。この人がお方集まつていたんだ。」
そしてニャン太は、この世界のあじさんたちに、この世界のあじさんたちの話を聞かされた。そして、運河のあじさんたちの話を聞かされた。



そして、シヤチホコおじさんは、運河のまわりには、たくさん眠っている、石造の船について話しました。
「そのころは、この急流の舟には、いろいろな船が入っていたし、めずらしい船の船で、運河を航していた。今では、この急流の舟は、石造の船で、運河を航している。そして、この急流の舟は、石造の船で、運河を航している。」





「シヤチホコおじさんは、ずっと昔から屋根の上で、この町をながめていました。だから、町のことや、運河・倉庫のことについては何でも知っている、ものしりおじさんでした。」

そして、ニャン太に向かつて言いました。

「ニャン太君、こんなすばらしい運河や倉庫を持っている、この町に生まれてよかつたネ。」

ニャン太はシヤチホコおじさんの話を聞いてうれしくなり、自分の町をほこらしく思いました。

「シヤチホコおじさん、元気でね。」

ニャン太は、シヤチホコおじさんに別れをつけると、船に遊びに行きました。



ニャン太が、船の上まで来ると、どこからか、美しいバイオリンの音が聞こえてきました。

「ニャン太は、おどろいて、おどろきを見ました。」

すると、運河のほとりて、あるピンクのネコがバイオリンをひいていました。そのピンクのネコは、ニャン太は一口ほれ。チューニ郎が、

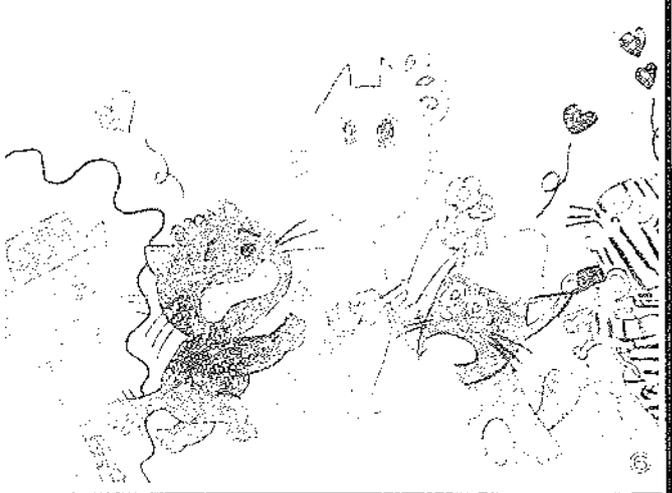
「おい、ニャン太どうしたんだよ。」

声をかけてもニャン太には聞こえませんでした。そのピンクのネコは、毎日、運河のほとりて、バイオリンをひきました。

ニャン太はピンクのネコに、

「およめさんになつてほしい。」

と思いました。



だけとほかにも、そのピンクのネコを好きなおネコは、たくさんいました。大きな魚をプレゼントするネコ、香いお花をプレゼントするネコ、おどろかしていたチューニ郎をつかまえてプレゼントしようとしているネコもいました。

そして、ニャン太、

「ミヤー子さん、お花のおよめさんになつてほしい。」

と、いいます。

ピンクのネコは、ミヤー子さんと、お花のおよめさんの、

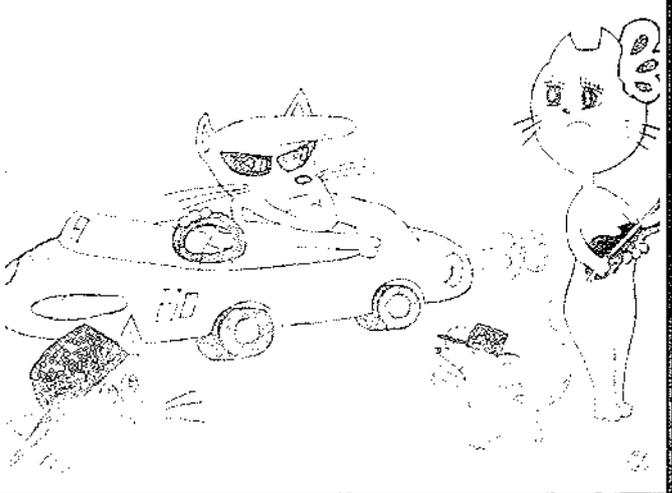
「およい、ニャン太どうしたんだよ。」

声をかけてもニャン太には聞こえませんでした。そのピンクのネコは、毎日、運河のほとりて、バイオリンをひきました。

ニャン太はピンクのネコに、

「およめさんになつてほしい。」

と、いいます。



高い自動車でカッコーと、道を走りまわっているネコは、ミヤー子さんをおよめさんと言っていました。

オレの名前は、金持ちのネコさんというんだ。オレのおやじは、大金持ちだから、これはオレの自動車なんだ。

オレのおよめさんになつてくれたら、この自動車で、好きなところへ、自由にいつてあげるよ。」

自動車の好き者、金持ちのネコさんという、

「およい、ニャン太どうしたんだよ。」

声をかけてもニャン太には聞こえませんでした。そのピンクのネコは、毎日、運河のほとりて、バイオリンをひきました。

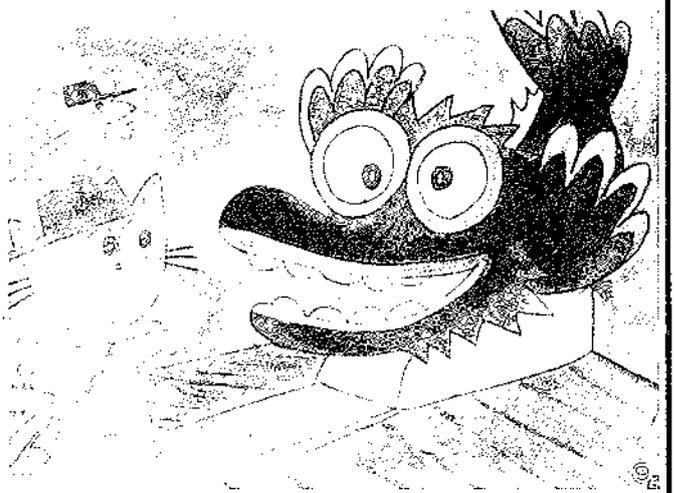
ニャン太はピンクのネコに、

「およめさんになつてほしい。」

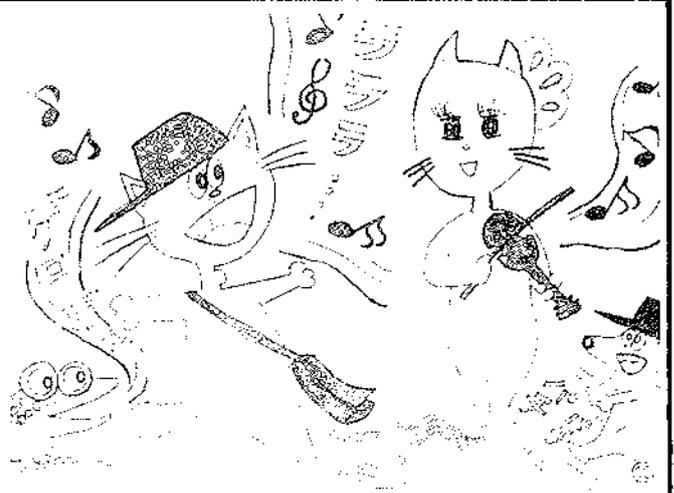
と、いいます。



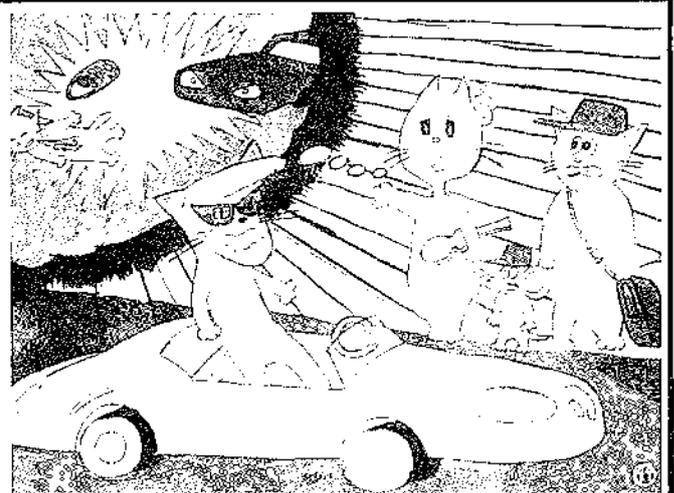
ニャン太はこまづてしまいました。
 「みんなは、ミヤ子さんにプレゼン
 トするものを持っていくけれど、ホクは
 何も持ってこない。こまづたなー。
 何をプレゼントしたらいいんだろう。
 ねえ、チュー三郎。」
 通河のほとりを、ニャン太とチュー三
 郎が、考えながら歩いている時、チュー
 三郎は、いいことを思いつきました。
 「ニャン太君! そうだ、あの倉庫の
 屋根の上の、シャチホコおじさんなら、
 何かいい考えを、教えてくれるんじゃない
 かい。」
 二人は、急いで、シャチホコおじさん
 のところへ、いつてみることにきめまし
 だ。



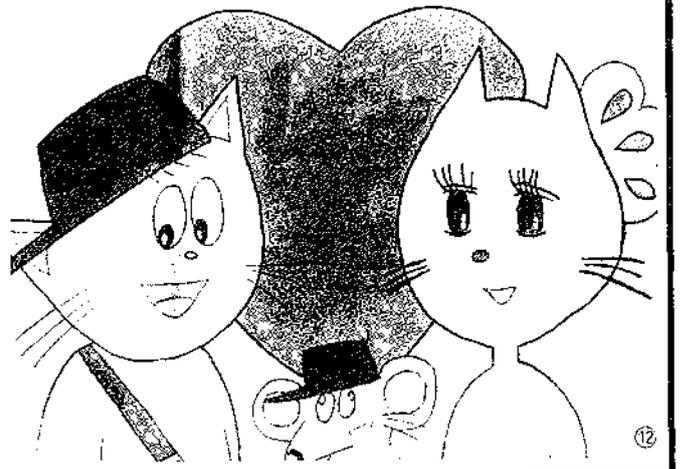
シャチホコおじさんは言いました。
 「ニャン太君、何をよくよしている
 んだね。そりゃー、君は何も持ってない
 かもしれないけれど、ミヤ子さんを好
 きな君の心は、誰にも負けないだろう。
 君の本当の気持ちで、かの女に「アタツ
 フしたら、いいんじゃないのかい。」
 「そうだ! ホクの本当の気持ちを、
 ミヤ子さんにつたえるんだ。」
 シャチホコおじさんの話を聞いて、
 ニャン太は、すこ元気になりました。



ニャン太は、ミヤ子さんのために、
 歌をうたうことにしました。
 ニャン太の歌は、とつてもへたくそで
 した。けれどニャン太は、心をこめて、
 うたいました。
 ミヤ子さんは、そんなニャン太を見
 て、はじめてにつこりと、ほほえみまし
 だ。
 次の日も、次の日も、またその次の日
 も、ニャン太はミヤ子さんのバイオリ
 ンにあわせて歌をうたいます。
 カエルのゲコ音も、いつしよにうたい
 ます。
 チュー三郎は手ひょうしを打ちます。
 そうしているうちに、ニャン太は、ど
 んどん歌がうまくなりました。



そんなある日、
 「うだつてばかりいないで、オンの自
 動車でドライブにいこう。」
 あいかわらさず、自動車を走っている金
 持ちのネコ三郎は、ミヤ子さんを、さ
 そいにやつて来ました。
 いつも見向きもしなかつたミヤ子さ
 んは、ネコ三郎に力をつけて睡りました。
 「私のお正さんは、自動車にひかれて
 死んだのよ。」
 その話を聞いて、ニャン太もチュー三
 郎もゲコ音も、とつても悲しくなりまし
 だ。
 そしてそれ以来、金持ちのネコ三郎は
 ミヤ子さんをさそいに来なくなりまし
 だ。



ニャン太の歌が、ミヤ子さんのパイオリンに、まけないくらいうまくなった時、ニャン太はミヤ子さんに向かって言いました。

「ホフのおよめさんになつてほしい。」

ミヤ子さんは、

「ええ。」



と言いました。ミヤ子さんは、およめさんになることにしたのです。

それから、ニャン太とミヤ子さんは毎日、楽しくすごしました。

ある日のこと、屋根の上で、シャチホコおじさんが泣いていました。

「シャチホコおじさん、どうしたの。」

ニャン太はたずねました。



シャチホコおじさんは言いました。

「じつはなあ、ニャン太君。人間たちが、この運河をつぶして、大きな道路をつくる話をしているんだよ。」

「えーっ、この運河をつぶして自動車

の通る道をつくるんだって。」

ニャン太はおどろきました。

「もしそうだったら、このあたりは、

かわいい自動車が、いっぱい走つてあぶなくなるし、ガスをたくさん出すから、息もできなくなる。今まで遊びに来てくれた多くの人たちは来なくなつて、ウシのことなど忘れてしまうにちがいない。」

シャチホコおじさんは、そう言つてなげきました。



「こんなにすばらしい運河をつぶして

まで、どうして道路なんてつくるのだろう。こんなにたくさんの人たちが遊びに来ているのにさー。」

ニャン太は悲しかったです。

つぶされる、という話が出てからとい

うもの、運河のほとりには、今まで以上に、たくさんの人たちが来ました。

「ウシは昔、ここで働いていたんだ。」

と、まことに話しているおじいさん。

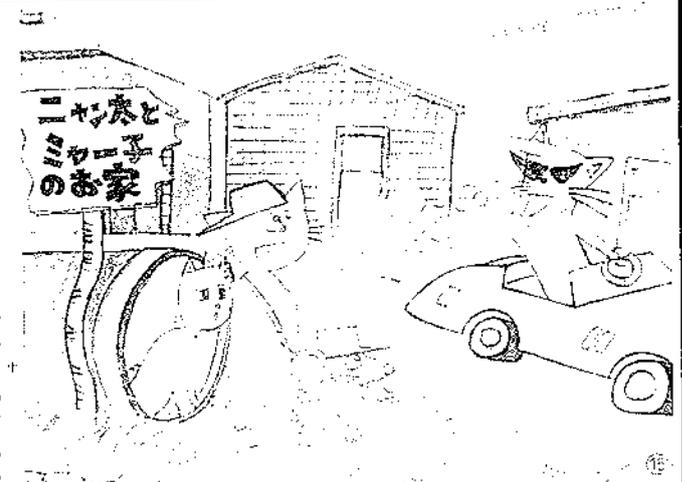
そんな人たちは、

「やつぱり、運河はすばらしい。」

そして、

「運河をつぶしてしまつたら、この街はどんなになるだろう。」

と、悲しかったです。



ニャン太とミヤ子さんの住んでいる

ところへ、また、あの自動車で来た、金持ちのネコそうがやって来て、言いました。

「やーい、おまえたちの好きな運河は

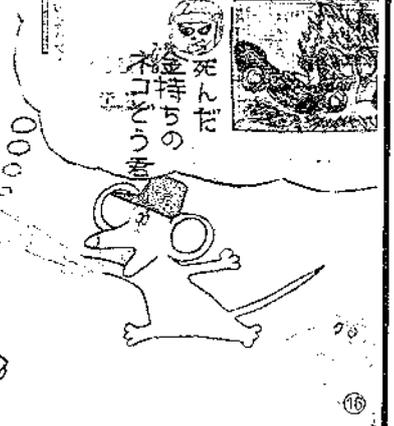
もうすぐ、つぶされてしまうのさ、そして、オシの自動車が走る、大きな道路ができるのさ。」

そうなつたら、おまえたちはこのまわりで遊ぶことはできなくなるし、歌だつてうたえなくなるのさ、サマー三口。

ネコそうは、そう言つと、笑いなからさつていきました。

ニャン太は、くやしくて、しなだめりませんでした。チューニ郎も、さきしりをしてくやしがりしました。

（スピード違反で正面衝突）



ところが、次の日の朝早く、チュー三郎が大あわてでやって来ます。

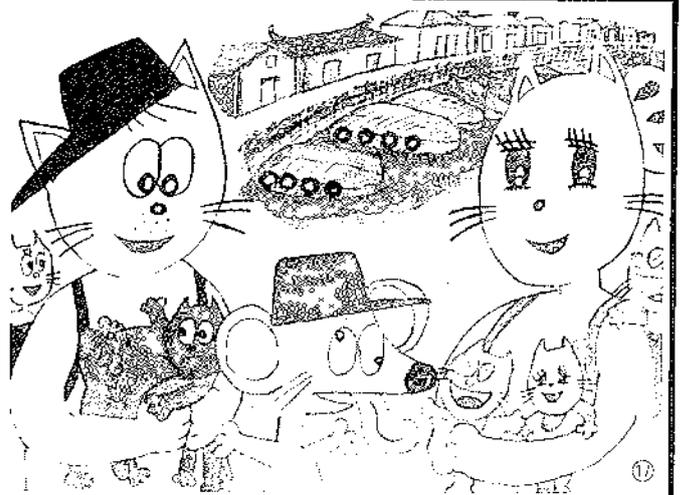
「たいへんだ!! ニャン太、ミヤ子さん、たいへんだ、たいへんだよ。」

「いったいどうしたの?」

「この新聞を見てごらんよ。あの金持ちのネコぞうきが、よつばらい運転の上、スピードを出しすぎて、タンプカーと正面しようつしたんだ。」

「えっ、ネコぞうさんが……。」

いやがらせばかりしていたネコぞうでも、こんな、むさんな交通事故で、死んでしまつたんで、かわいそつだなあと、ニャン太とミヤ子さんは、悲しくなつてきました。



でも、悲しいことばかりではありませぬ。

そのうち、ミヤ子さんは、六匹のかわいい子ネコをうみました。

ニャン太は大よろこびです。

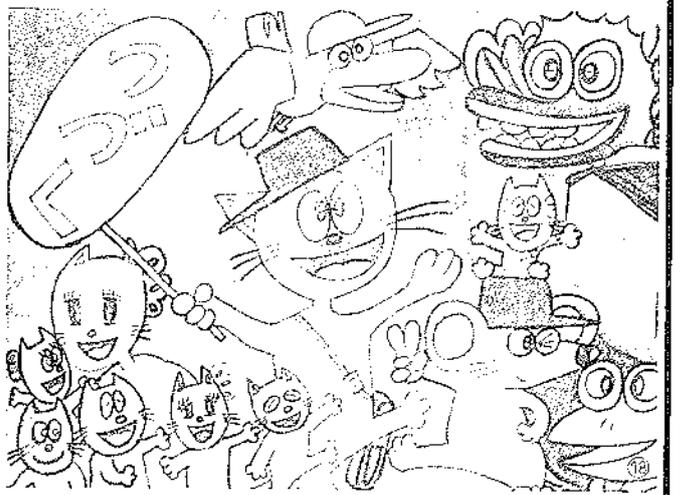
ミヤ子さんは、子ネコをだいて思いました。

「この子たちが大きくなるころには、この町は、どんなふうになっているでしょうね。」

お父さんになったニャン太も、

「オしたちの町は、この子たちのために、大切にしなければならぬ。」

そつた、この蓮河も、せつたい大切にして残しておかなければいけない。」と、決心したのです。



さて、第二部「ニャン太の大恋愛」はこれで、おしまいです。

物語は、第三部へとつづきます。

ニャン太、

ミヤ子さん、

そして六匹の子ネコたちは、どんな活躍をするでしょう。チュー三郎もがんばるよ。つづけて見てね。



その4

小樽夢の街づくり実行委員会

小樽の町の、将来のことを考える、若者たちが、あつまつてつづつた市民団体です。

昭和53年の秋にできました。小樽の町は、歴史のある、おちついた町として、全国の人たちから、うらやましがられています。占くさくて不便だ、といつてどんとなくなっているのです。

そこで若者たちは、小樽の町を夢や希望のもてる町にしていくには、全国の人たちから、うらやましがられておいて、そのなかに新しい活気を生み出して、こうとしていくのです。

若者たちは、そのために「ふいえすた小樽」というタウン雑誌を発行したり、夢の街づくりは蓮河からはじまる、といっています。

ふいえすた小樽



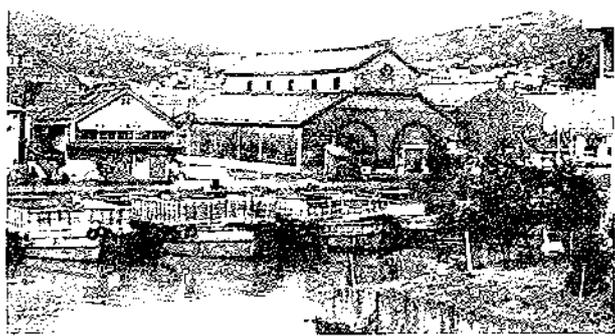
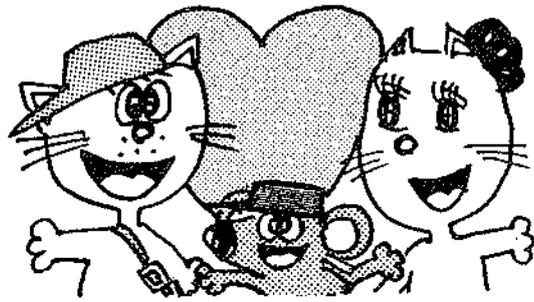
11

●夢の街づくり実行委員会発行の「ふいえすた小樽」



佐々木興次郎
●小樽夢の街づくり実行委員会会長 ●34才
●喉歪「北沢」店主

第2部 ニヤン太の大恋愛から
まごころ・愛・そして運河



●「人々の心のいこいの場」小樽運河

「第2部」ニヤン太の大恋愛から

さて、みなさん、第2部「ニヤン太の大恋愛」は、おもしろく読めましたか。運河のほとりでも、ニヤン太は、とてもすてきな仲間たちと、であいましたね。

大きな倉庫の屋根の上で、今日もシャチホコおじさんは、運河や、そこに集まる人々を見守っています。

自動車をのりまわすネコぞうは、いやなやつでしたが、事故をおこして死ぬなんて、かわいそうなことでした。

ニヤン太の「まごころ」がつうじて、ミヤ子さんとニヤン太は愛しあうようになり、二人は、しあわせな家庭をつくりあげていきます。

ニヤン太と仲間たち

ニヤン太って、なんていい性格のネコなんでしょうね。おぼれかけたチュー三郎をすくうために、運河にとびこむニヤン太。

ミヤ子さんのために、たとえへたでも、一生懸命にうたうニヤン太。シャチホコおじさんが泣いていると、

どうしたの、と声をかけるニヤン太。まごころと愛で人に接するニヤン太。こんなニヤン太だからこそ、たくさん仲間たちと、なかよく、くらししていけるのですね。

運河を大切にしよう！

運河が大好きなニヤン太は、運河をつぶして道路にする、と聞いてびっくりします。

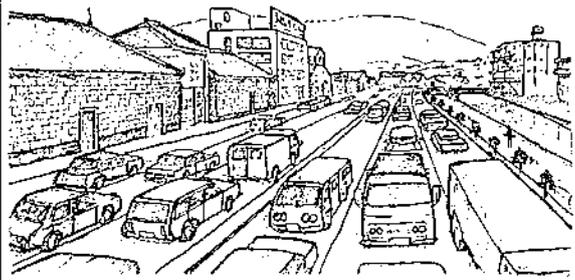
まごころや命、歴史や文化、この世の

その5

今、問題になっている、運河を埋めてつくる道路の計画のことです。北海道がつくる道路だから「道道」、港の近くを通るから「臨港線」とよばれています。



道々臨港線計画



●道々臨港線が完成したら、人の近づけない運河になってしまう

中には、お金では買えない、大切なものがたくさんあるのです。

運河は「歴史のある文化遺産」というだけではなく、お金では買えない「人々の心のいこいの場」でもあるのです。

ニヤン太は、「ぜったい大切にしてい、残さなければ」と、決心します。

ながい時間をかけてつちかかってきた、小樽の運河は、私たち小樽にすむ人間の「心のふるさと」であり、何にもかえがたい、大切なものなのです。

計画が立てられたのは、もう15年も昔のことです。そのころは、道路を通すことは町をよくすることだ、と単純に考えられていた時代でした。

道道臨港線は6車線という、とても大きな道路です。小樽の町の中には、まだ、こんな大きな道路はありません。

道路を通すことには、良い面もたしかにあります。悪い面もあるのです。

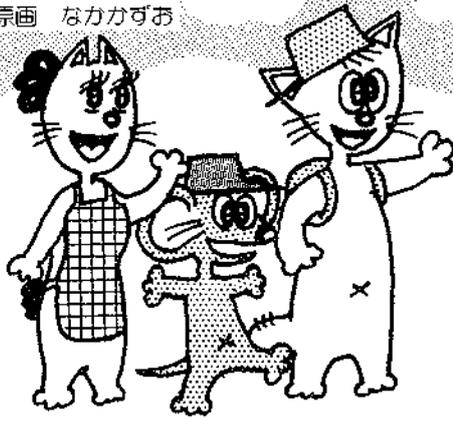
自動車のゆきよきの激しい、大きな道路というものは、歩いている人にとってはとても恐ろしいものです。

自動車がたくさん走るとそれだけ、交通事故もふえますし、排気ガス、騒音、振動などによる公害も起きてきます。

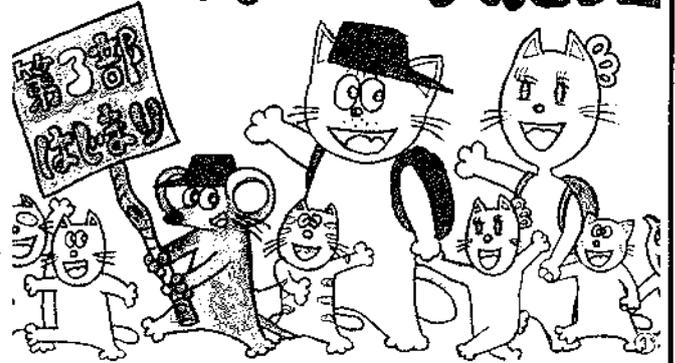
人間は「側利さ」だけで生きるものではありません。たとえば公園のような静かな場所も必要ですし、ほかのことに気をとられずに遊ぶことも必要なのです。

こう考えてみると、運河のような、とてもがっしりとして、おちついた場所をつぶしてまで、大きな道路をつくるのは良いことではありません。

原作 松岡つとむ
原画 なかかすお



ニャン太一家の大活躍

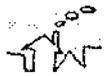


ニャン太とミヤ子さんの間に生まれた、六匹の子ネコたちが大きくなると、ニャン太は毎日、町へ連れて行くようになってきました。

そして、シャチホコおじさんが話してくれた、この町の歴史を、子ネコたちに話しました。

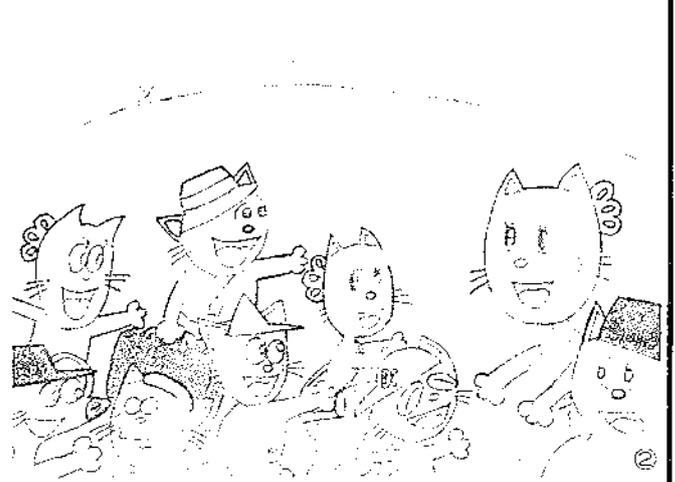
ニャン太は、子ネコたちに、「この町に生まれてよかったわ。」と、話しました。

ニャン太が、この町を好きになったために、子ネコたちは、だんだんと、この町を好きになりました。



そのうち、子ネコたちは、ひとりずつ町へ出かけるくらい、大きくなりました。

子ネコたちは、ミヤ子さんの作ってくれた、駒子とカバンを下げて、町へ出て行きました。



ニャン太は、おじいさんでした。

「自動車には、気をつけるんだよ！」

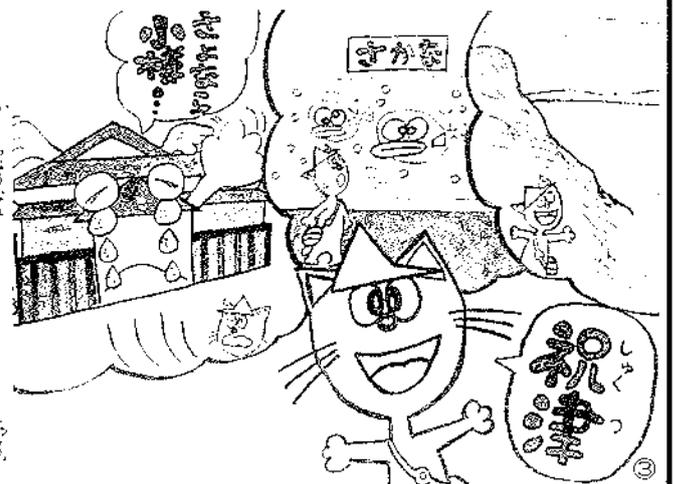
一日しゅう、町の中を歩きまわった子ネコたちは、坂を下つくと、運河のほとりに帰って行きます。

ドカンの家へ帰ると、今日、町であつたことや、見てきたものを、全部、ミヤ子さんに話しました。

ニャン太はとなりでそれを聞いていました。

その日、長男のニャンベイは、祝津に行つて来ました。

そして、きれいな港を見たことや、水族館では、水そうの中を泳ぐ、魚のおれを見て、おどろいたことを話しました。



祝津は古くは、鯉漁が盛んでした。

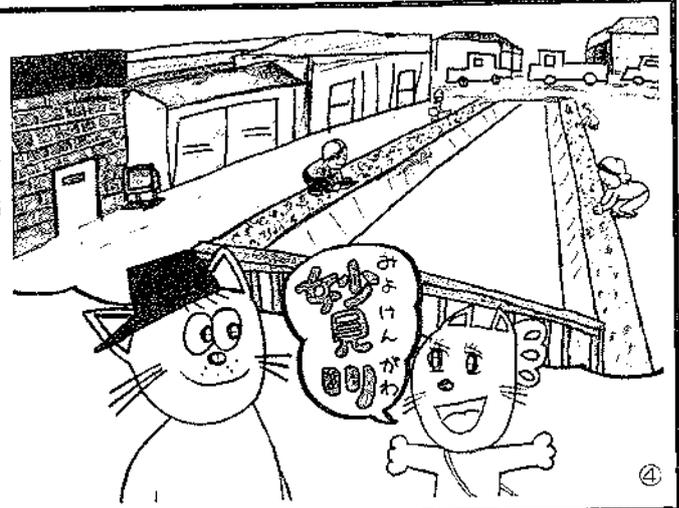
昔山郎はその昔、鯉御殿と呼ばれる建物でした。

ニャンベイが、そばを通つた時、その昔は、泣いていました。

じつは、生まれたこの土地をはなれて、開拓村へ行くことになるのです。

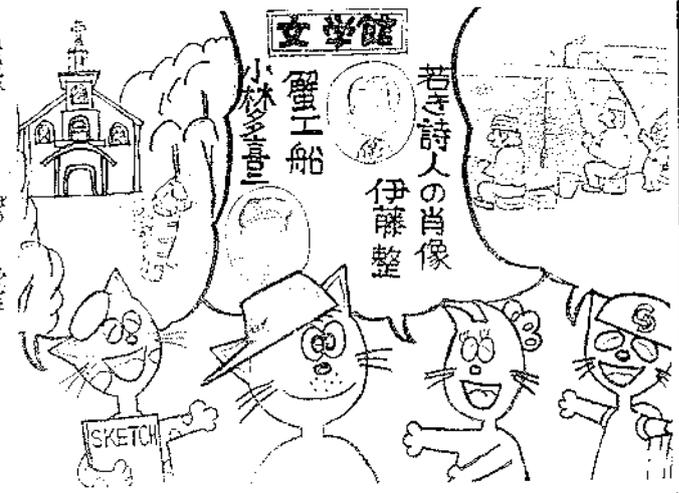
「この町の財産が、またひとつ減らうとしている。」

とニャン太は思いました。

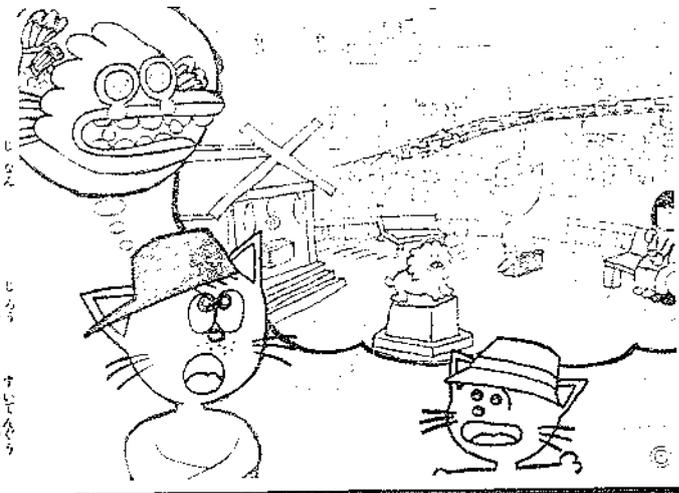


その日、長女のサツラちゃんは、運河に流れこんでいる、川の探険に出かけました。
 妙見川という川のほとりには、たくさんの花が咲いていて、とてもきれいでした。
 「昔は、きたなくてよかったです、妙見川だったけど、それをきれいにしよう」とある一人のおばあさんが花を植えるはじめたのが、町内会の花植え運動にまてなつたんだよ。」
 と、サツラちゃんは話します。

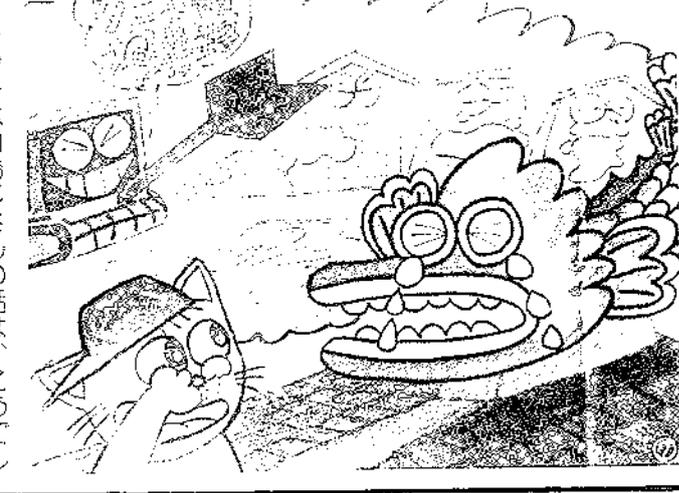
四男のニヤン坊は、港へ、つりに行ったことを話しました。
 また次女のベケちゃんは、図書館や、文学館に行きました。
 そして、この町で生まれ育つた、有名な小説家のことを調べたり、彼らの作品の中に、この町のことを、よく出てくることを話しました。
 そして三男のミネ作は、毎日、キャンバスを下げて、町に写生に行きます。
 今日、富岡教会を、かきに行ったのです。
 そしていつも、
 「この町は、絵になる風景が多いな」と、話します。



その日、次男のトラ次郎は、水大宮に遊びに行きました。
 そして、そこからだと、着に、大きな白い船が、入つて来るのが見えたことや、早いスピードで、自動車の走る道路がついているのを見て、おどろいたことなどを話しました。
 その大きな道路は、運河のすぐそばまでつづいているのでした。
 ニヤン太は、トラ次郎の話を聞くと、先日、座敷の上で泣いていた、シャチホ「おじさんの話を思いうかべました。」



シャチホ「おじさんの話は、こうでした。
 「それは、高速道路といって、自動車が早く走れるように、つくられた道路なんだよ。
 その道路がついたあたりは、有観というところで、もともと、ウシの仲間の音聲が、たくさんならんでいたんだ。
 それが道路工事のため、つきつきとこわされた時、この町の人たちは、はじめて気づいたのさ。この町は、他の町にはない財産を持っているんだ」ということをね。」
 シャチホ「おじさんは泣きながら話していました。」





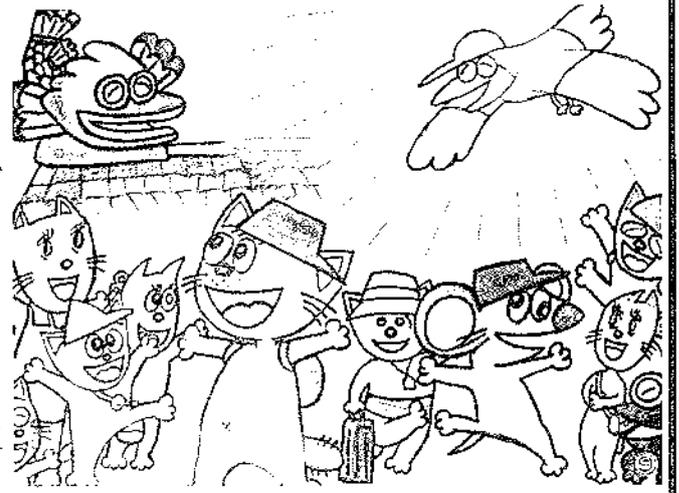
その道路ができてからというもので、今まで以上に多くの車が、運河のまわりを通るようになりました。ニャン太の家のすぐそばを、大きな車が、いばりながら走ります。その振動や騒音・排気ガスの量は今までより、ふえたのです。

それに、運河のまわりには、たくさんの人たちが遊びに来るのですが、安心して歩けないのです。

その上、その自動車たちは、運河と倉庫の間を走って、写真を撮るのをじやまするのです。

「これ以上、振動が大きくなったら、ワシは屋根の上から落っこちちゃいますよ。」

シャチホコおじさんは、そう言っただけきました。



そんなある日、カメメのシーガル君があるニュースを持って、ニャン太の家にやってきました。

「おい、ニャン太!! お祭りだ、お祭りだ、お祭りがあるんだー!!」

「エーッ、お祭りだつて!」

「この運河のほとりでお祭りがあるんだよ。」

「シーガル君、それは本当なのかい。」

「本当だとも。もう多ぜいの人たちが運河のまわりに集まって、運河まつりのじゅんぴをしてるよ。」

「コーシ、みんなでじゅんぴをしに行こつ。」

そうさげぶと、ニャン太と子ネコたちは、シーガル君と一緒に出かけました。



祭りの広場では、若い人たちを中心にみんな一生懸命、じゅんぴをしています。みんなのシャツは、汗でびしょじりでも、すごく楽しそうです。

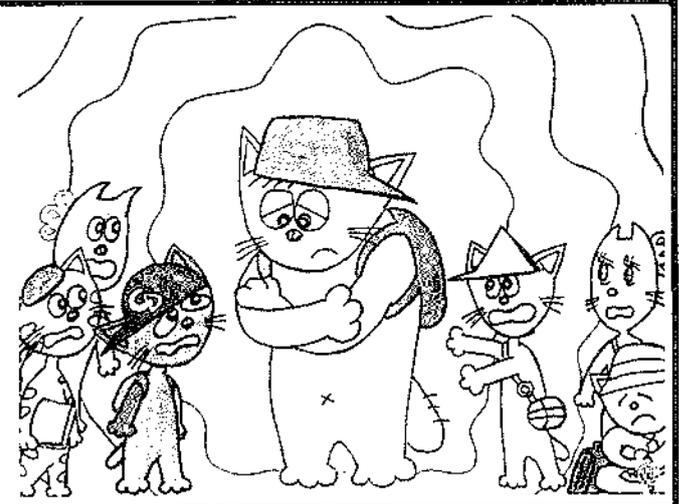
「お兄さん、お姉さん、ホフたちにも手つだわして下さい。」

ニャン太たちがそう言うと、お兄さんは手を止めて言いました。

「そうかい。だったら君たちは、手ピッコ広場をつくってくれ。」

ここに、夢のある広場をつくってくれ。」

「エーッ、夢のある広場だつて。」



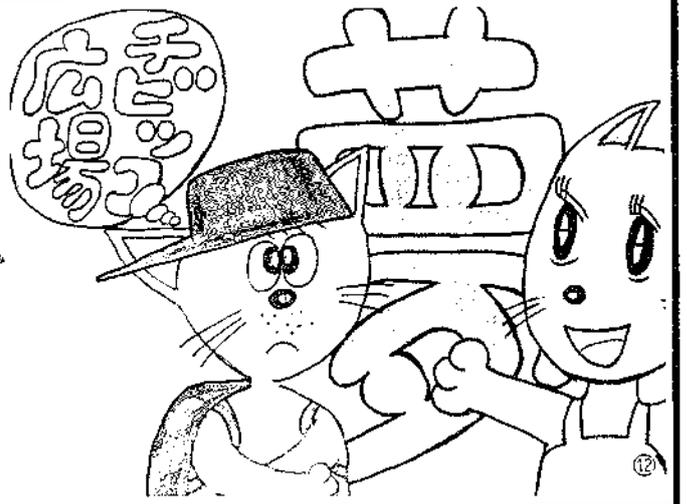
ニャン太たちは、「手ピッコ広場」をつくることをまかされました。

でも、みんな、何やら考えこんでいるみたいでした。

「お兄さんたちは、ここに、夢のある広場をつくってくれ、とお願いされた、夢のある広場つて、いったい、どんな広場なんだろう。」

広場に集まって、みんな、こまってしまいました。

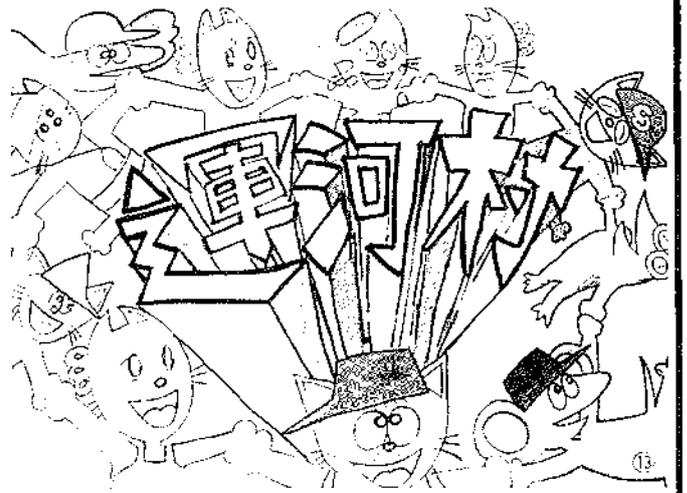




そんなニャン太を見て、ミヤ子さんは言いました。

「ニャン太、何を悩んでいるの。私たち、ひとりひとりの、夢は小さいわ。だけど、みんなの夢をあつめたら、すばらしい広場になるんじゃないの。今まで私たちは、つくられた広場の中で、遊んでいたけど、私たちの遊ぶ広場は、私たちの力を合わせてつくるのよ。みんなの夢をあわせると、夢はどんな広がついていくわ。それに、みんなの知恵と力をあわせると、『夢』のある広場もできないことはないわ。」

と、ミヤ子さんは言いました。



「そうだ。」
ニャン太は思いました。

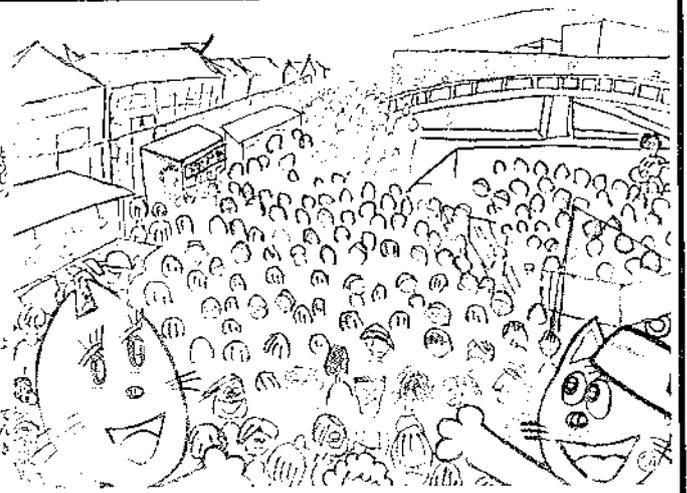
「ボクには、六人の子どもたちがいるんだ。」

それに、チュー三郎やシーガル君、ケロ吉くんや、ほかの仲間たちもあわせると、ちゃんとした『運河村』だ。

その『運河村』の、みんなの方と知恵をあわせると、何かすごいものができるかもしれないぞ。

そう思うと、みんなすく元気になりました。

「ニャン太、みんな、がんばるんだ。屋根の上では、シャチホコおじさんがみんなを見守っていました。」



お祭りの当口は、とても良いお天気でした。

ヒュー、バーン。

花火が上がると、運河の祭り、ポートフェスティバルのはじまりです。

運河のまわりの道は、交通止めになって、今日はお祭り広場にはやがわり。

その道のまわりには、出店ガストリと並んでいます。

ラーメン屋さん、あかし屋さん、みんな、手づくりの店ばかりです。

いつも、あまり使われていない階の上では、コンサートが行なわれたり、のど自慢大会やビアガーデンになっている時もありました。



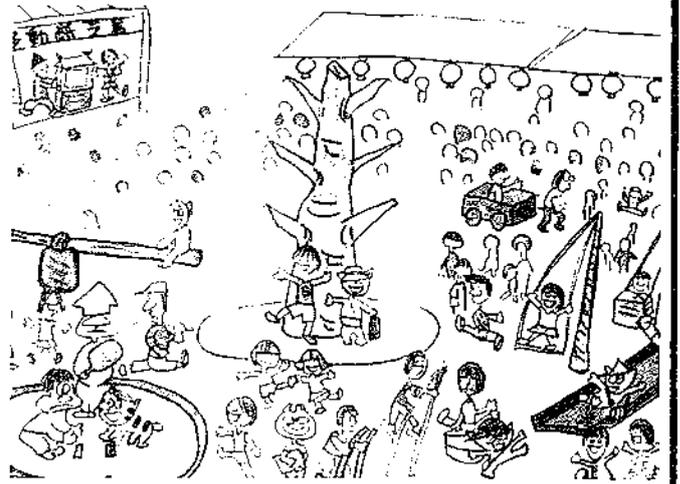
ロック広場では、若い人たちが歌っています。

みんな、年に一度の、この運河祭りのために、一生懸命、練習をかさねてきたのでした。

お年よりの人たちも、その中に入つて歌ったり、踊ったりしています。

みんな、楽しそうです。





中でも、「チビツ子広場」はすごい人気でした。

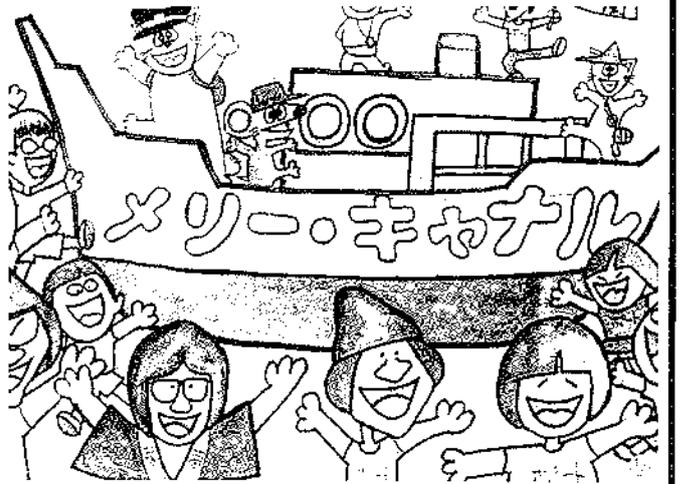
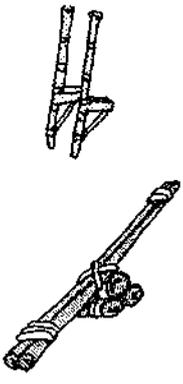
そこには、ブランコやすべり台ほまちゃん、いろんなものがありました。

すもつの土俵があります。

竹馬があります。

ターゼンがあつたり、木の枝から水の吹きだす、かわった、ふん水もありました。

広場では、たくさんの子ビツ子が、遊んでいます。



その中でも、ひときり自立しているのは、ニャン太たち、運河村の、みんながつくった白い船でした。

その船の上で、ニャン太は、みんなに手をふっています。

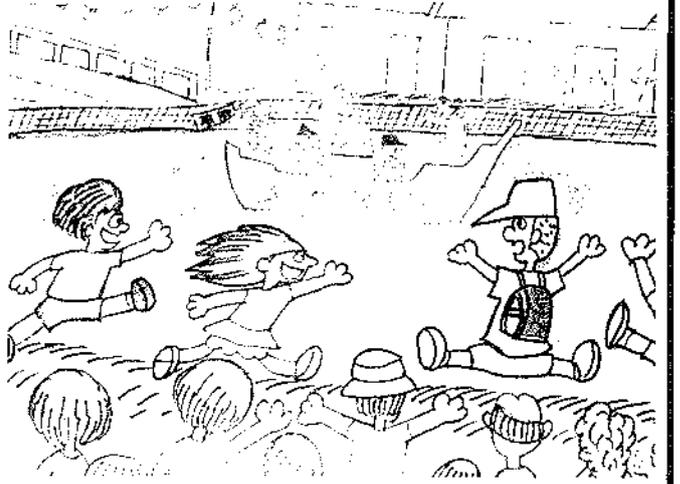
「みなさん、これはボクたち、運河村の仲間がつくった船です。

大人の力をかりなくて、ボクたちの力だけで作りました。

ボクたちの、知恵と力を出しあつて、つくった船を見て下さい。」

それを聞いて、大人も、子供も、あどろきました。

「みなさん見て下さい。ボクたちの夢をのせた、このメリー・キャナル号の進水式を。」



ニャン太たちのつくった船は、人々に見守られながら、運河の上を、進みまじしよに走ります。

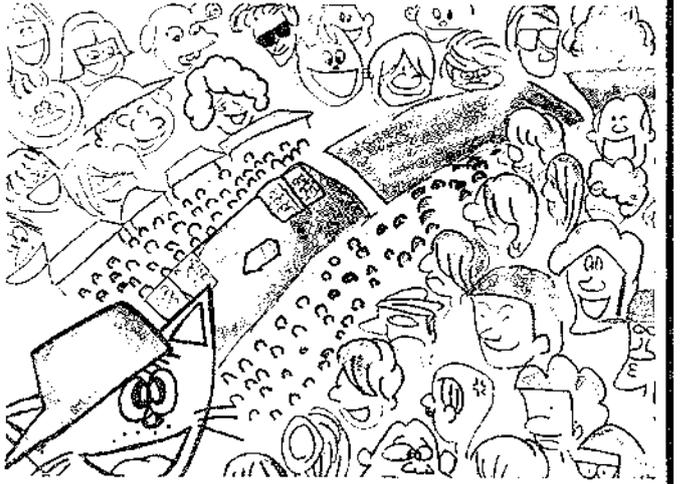
その岸辺を、子どもたちは、船といっしょに走ります。

運河村のみんなは大よろこびでした。

そして、

「ボクたちにも、あんなりつばな船をつくる力があるんだな。」

と思いました。



その次の日も、お祭りはつづきます。次から次から、人はやってきました。となりの町から、電車でのもつて、やって来る人もいました。

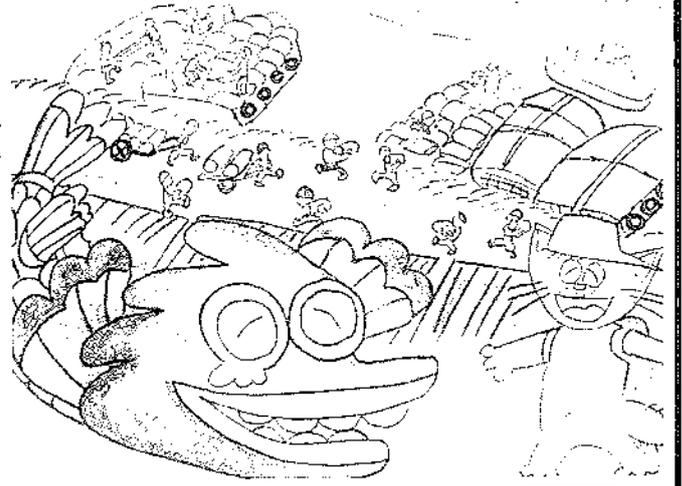
そんな人たちは、運河のある小橋の町を、うらやましがりました。

なぜなら、その人たちの町には、小橋の、運河、みだいに、ほごるものがないのです。

「この町の人たちは、やっぱり運河が好きなんだ。」

そして、この町に住むほごりが、この祭りの方になつていくんだなア。」

と、ニャン太は思いました。



倉庫の屋根の上では、シャチホコおじさんが、うれしそうな顔をして見ています。

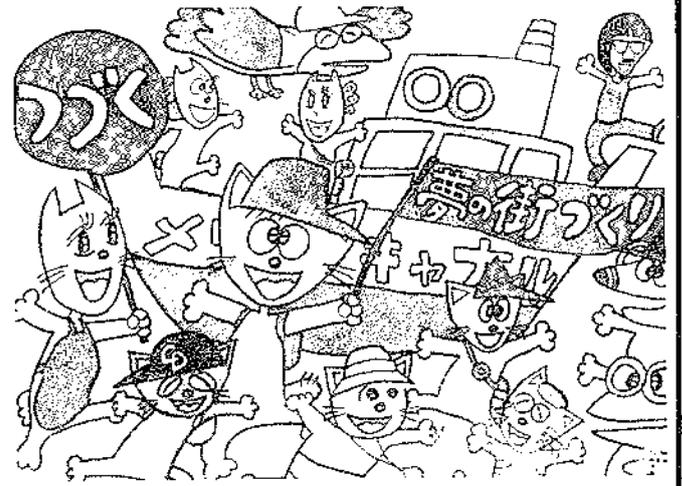
ニヤン太は、シャチホコおじさんの所へ、遊びに行きました。

「ニヤン太君、ワシは、昔の運河を見るよつだよ。」

昔は、毎日、こんなに人が集まっていたものぞ。

このまわりは、生活の場だったんだ。今では自動車に占領されているけど、この運河のまわりには、いつの時代にも生きるものたちの広場であるような、気がするよ。」

ニヤン太も、運河をつぶしてなるものか、と思いました。



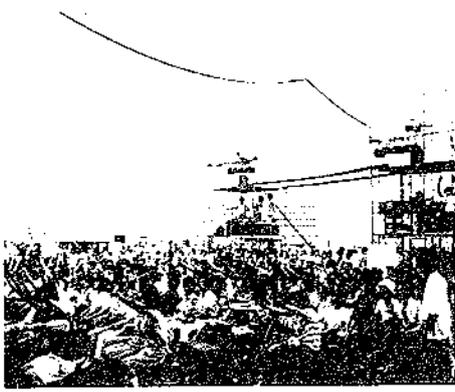
こうして、運河のお祭り、ポートフェスティバルは、ニヤン太たちに、いろいろな思いを残して、終わりました。

チビツ子広場が、夢のある広場であったように、この冊を、夢のある冊にした、とニヤン太は思いました。

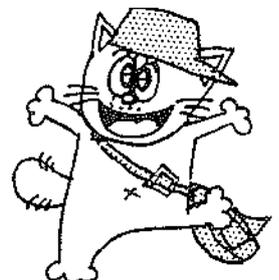
ポートフェスティバルに集まった人たちの、知恵と力を合わせると、夢の町づくりも、夢ではないような、気がしました。

そのためには、運河は、せつたになくなくてはならないものだ、と思いました。そして、小樽の町づくりを、運河からはじめるべきだ、とニヤン太は思いました。

ポートフェスティバル・イン・オタル



▲もりあがる「ロック広場」



若者の手づくりのお祭り

その6

港の町の小樽に、港祭りがなれないのはおかしい。

「ロックやフォークのコンサートの
あるお祭りをやりたい」
という若者や、

「運河を守りたい 運河でお祭りをや
れば、たくさんの人たちが運河のよき
を見なおすだろう」

といった、夢をもった若者たちが集
まってはじめてお祭りです
ポートフェスティバル、とは、英語
で港祭りという意味ですが、昭和53年



▲人気のある「チビッコ広場」

このお祭りの特徴は、
「お金も地位も権力もない若者たちが
集まってやっている
コンサートのステージを作ることや
会場の前付け、チビッコ広場の遊具
など、ほとんどのものを自分たちの手
でつくる、手づくりのお祭りである」
「お祭りの出店も、しろーとの手づく
り商品が中心
運河、はしけ、などを会場にしてい
ること」
「小樽で活動しているアマチュアミ
ュージシャンの、フォークや、ロックの
コンサートのがある」
などですが、やはり、道路をつくる
ために、埋めるか埋めないか、で争か
がれている運河を会場にしているところ
が、一番注目されています
お祭りを見にくる人も、1回目は10
万人、2回目は15万人、3回目は18万
人、4回目は19万人と、だんだんとふ
えて、「小樽運河祭り」として全国的
にも有名になってきました。

第3部 ニヤン太一家の大活躍から

生きる・こころ・そとと運河



みなさん、第3部「ニヤン太一家の大活躍」は、おもしろかったです。紙芝居「ニヤン太シリーズ」は今のところ第3部までです。家族がいっぺんに8人になったニヤン太一家ですが、この先は、どうなっていくのか、気になるところですね。

みんなでなかよく

空地の下カンの中に住んでいた、子ネコのニヤン太も、一人前のネコになりましたね。

今では6匹の子ネコのお父さんです。子ネコたちは、ちやうどニヤン太が子どものころに、この小樽の町を探険に出かけたように、毎日いろいろなところへ出かけてゆきます。

ニヤン太はそれを見守っています。

きつと、ニヤン太の仲間たち、チュー三郎やシャチホコおじさんも、子ネコたちを見守っているのでしょう。

紙芝居では、ニヤン太がどんな生活をしているのかは、書いてありません。

けれども、前からの仲間たちと「運河村」で、なかよくくらしているのでしょう。

うね。

みなさんはどうですか。まわりの人たちとなかよくしていますか。

ネコもそうですが、人間も、一人で生きていくわけではありません。

みんなが生きているから、自分も生きられるし、自分が生きているから、みんなも生きられる。世の中って、そんなものなんです。

みんなで生きていくためには、なかよくすることが大事です。

みんなの生きる町

みなさんの生きている、この小樽ってどんな町なのでしょう。

「社会」などで、みなさんも勉強することでしょうが、小樽は、北海道のなかでは、もっとも歴史の古い町のひとつで

す。

昔は、鮭漁が盛んでした。

長男のニヤン太が見てきた「青山邸」

は、そのころの建物です。こうした建物は、今からつくるといふわけにはいきません。つまり、かけがえのない、小樽の財産だったわけですね。

古い物だからありがたい、というのではありませんが、小樽には、明治なら明治の、大正なら大正の、それぞれの時代の建物が、とてもたくさん残されています。

よその多くの町では、歴史は本からしか学ぶことができません。が、小樽では歴史を、じつさいの物から学ぶことができるのです。

海を前に、山なみを背に、歴史の町なみを残して、地しんや災害の少ない町、それが、小樽の町なのです。

こういう、歴史の町なみを残した町はあまりないのです。だから、小樽に観光にくる人がたくさんいます。

小樽に住む人たちが、小樽を愛し、ほこりに思い、さらにその良さをのばそうとする、その結果が、小樽の町なみというものになったのです。

町というものは、まるで、生き物のようなものです。

ほうっておけば、病気にもなります。いろいろと世話をしてやらなければなら

多くの文学家を生んだ町

冬が近くなると、ほくはそのなつかしい国のことを考えて、深い感動に促へられて

いる。そこには、運河と倉庫と税関と棧橋がある。

そこでは人は重く苦しい空の下を、どれも背をまげて歩いていく。

僕は何処を歩いていようが、どの人をも知っている。

赤い断崖を処々に見せている階段のやうに山にせり上っている街を、ほくはどんなに愛しているかわからない。



▲小林多喜二文学碑(旭展望台)

この文学がらもよくわたります。

りません。みなさんも、みなさんの住む町「小樽」をそだてていくことを、ひとつ考えてみてください。

夢と勇気をあわせて

みなさんも、7月にひらかれる、運河のお祭り「ボートフェスティバル」にはいったことがあるでしょうね。

ポートフェスティバルは、運河ぞいでひらかれます。

運河と、そのまわりの倉庫群が、お祭りの舞台です。

ということでは、いちばん小樽らしい場所を舞台にえらんでいるわけです。

ポートフェスティバルを初めてひらこうとした時のことです。お祭りをやりたいうという人たちと、ほくらの力ではとてもむりだ、という人たちがいました。みんな20代でした。みなさんからすれ

花のある川…「妙見川」



田にすんでいる人たちに、つて、水へが身近にあるということは、とても幸運なことです。そして、水へに花が咲

いている光景は、なんともいえ、いいものですね。小樽の町の中を流れている妙見川には、春から秋にかけて、きれいな花がさきみだれていきます。

はじめは、一人のおぼさんのはじめた花植えが、町内会の花植え運動にまで、なつたものなのです。

みんなの力をあわせて、みんなの力をよくしていく、とてもすばらしいことです。

ば、大人にみえるでしょうが、世の中では、まだまだ子どもです。

お金もないことですし、むりかもしれない、とは、みんな思っていました。でも、やればできるんですねえ。

みんなの知恵と、力と、そして大事なのは「夢」と「勇気」をあわせたら、あんなすばらしい、ポートフェスティバルができたんです。

「運河村」のみんなが力をあわせたように、ほんもののポートフェスティバルも、みんなの力をあわせることが、大事だったのです。

ちびっ子広場は、2回目のポートフェスティバルからはじめたのですが、このじゅんびもたいへんです。みなさん、どうです。来年はみなさんも、じゅんびをてつだいにきませんか。けっして、らくなしことではありませぬが、だいじょうぶ、みんなで心をあわ

みんなの広場「運河」

運河は、わたくしたちにとって、ほんとうに大切な場所です。いつの時代にも、生きるものたちの広

場です。

「運河をつぶしてはならない」というわたくしたちやニャン太の願い、そして「小樽の町づくりを、運河からはじめよう」という夢も、みんなの知恵と力と勇気をあわせれば、かならず、いつかできるのです。



その7



●中島川とめがね橋

長崎中島川まつり

九州の長崎にある中島川という川には、約1kmの間に、江戸時代

にかけられた14本の石橋が並んでいます。その昔、人々がお金を出しあつてつくった橋だそうす。

ところが、川を埋め立てて道路にする計画が発表されたのです。そんなことをしたら、大切な石橋は、全部こわされてしまいます。

そこで、長崎の人には集まって「中島川を守る会」をつくったのです。

川のそうじをし、町のみんなに、川と橋を守ろう、と呼びかけました。

若者たちは、中島川ぞいで、毎年、春と夏に、手づくりのお祭りを開きました。

そんな努力が実って、本当に「川は市民の家」になったのです。

この中島川の運動は、小樽の運河を守る運動と、とてもよく似ているので「姉妹提携」をむすんでいます。



その8

滝川河原まつり

滝川は、北海道のほほまん中に

ある、人口5万人の町です。右様平野のまん中ですから、小樽とはちがって、たいらな町です。

今から2年前に、この町を流れている滝川河原のたもとで、小さなお祭りがもよおされました。

滝川の若者たちは、小樽でのポートフェスティバルを見て感動し、自分たちも、自分の生まれた町で、自分たちの手で、何かをつくり出して、「こう」と、手づくりのお祭りをはじめたのです。

広い野原と、広い河原を舞台に、10数人の若者の手で、第1回河原祭り、が開かれたのです。



●小さいけれど、とても楽しい河原まつり

手づくりの出店や、古着コーナー、ちびっ子たちと一緒に歌ったり、人形劇も登場したり、本当に、人と人とのふれあいを大切にしたお祭りでした。そして、ちびっ子天国のお祭りでもあるのです。

いろないおどろ 色内大通りは ほっかいどう 北 海道 の ウォール街 といわれた かつて



ウォール街とは、アメリカのニューヨークにある街で、世界で一番、銀行があつまっているところぞう。

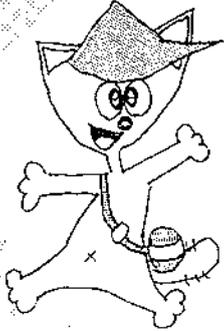
色内大通りは、むかし銀行がたくさんあつまっていたので、「北海道のウォール街」とよばれました。

しゅうてん 終 点

いりふねじょうじつがい 入船十字街へ



30. フジ屋家具 (ふじやかく)



あぶねえな！ 気をつけろい！

妙見川



1. 日本銀行 (にっぽんぎんこう)



3. 紳装 (しんさう)



2. 中央バス (ちゅうおうバス)



24. 缶友会館 (かんゆうかいかん)

しゅうてん 出 発 点

緑山手

通 り



4. エルニー



5. 旧拓銀 (きゅうたくぎん)



25. 三井銀行 (みつゐぎんこう)



29. 林屋製茶 (はやしやせいちゃ)



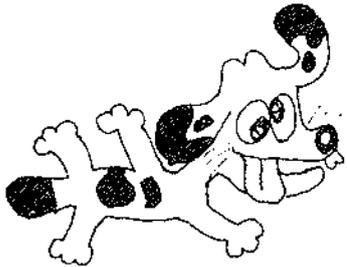
26. 岩永時計店 (いわながとけい)



27. 千秋庵 (せんしゅうあん)



26. 名取商店 (なとりしょうてん)



ワイワイ とっても、 すてきな建物がいっぱい！



小樽の町は 歴史の ちよ金ほこね！

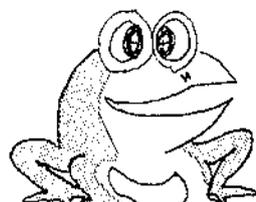
浅草橋

小

おたるうんが 小樽運河と 近代 石造倉庫群 建築

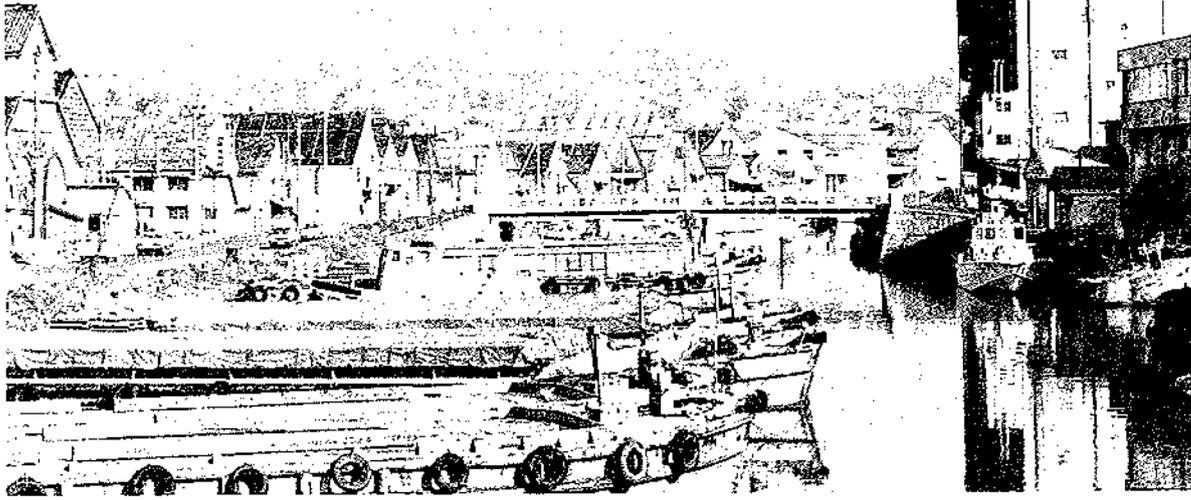
東京大学の村松道太郎教授は、「小樽運河と石造倉庫群は、神戸の商人屋敷の延長線上と、有名なグランドホテルのある長崎の地味とを

つなぐ、本物の近代化を象徴するものである。この倉庫群は、明治の繁栄を象徴するもので、今も残っています。」



自動車に 気をつけて いきましょう

小樽運河と石造倉庫群



今、「運河を残そう」という意見の人たちと、「運河を埋めて道路にしよう」という意見の人たちがいます。

どちらかに決まるまでは、まだ時間がかかることでしよう。どちらにしても、明日の小樽を生きるのはみなさんです。

みなさんはどうですか。運河のけしきは好きですか。

駅前をまっすぐ港へむかって、ゆるい坂をおりてゆくと、中央橋という橋があります。

この中央橋の下が「小樽運河」です。正しくは「第一期運河」といい、勝納ふ頭のところは「第二期運河」があります。

どちらも、小樽の運河にはちがいないのですが、今では、「小樽運河」といえば「第一期運河」のことをいいます。

運河には、はしけ、ひき船、漁船などが浮かんでいます。

荷をつんだはしけもあれば、からのはしけもあります。

海洋少年団のカッターもありま

すし、海上保安庁のランチもあり

ますね。

北浜のほう、つまり、手宮のほ

うへいくと、漁船が多くなります。

南のほう、つまり、妙見川のほうへいくと、川から流れこんだ土やゴミなどがたまって、河原のようになってい

ます。

たまって、河原のようになってい

ます。

たまって、河原のようになってい

ます。

たまって、河原のようになってい

ます。

たまって、河原のようになってい

ます。

どうして、運河は、
カーブしているの？

妙見川のほうの運河のはじから、手宮のほうのはじまで歩いたら、何分くらいで歩けるでしょうか。

みなさんなら15分くらいでしょうか。大人なら12分くらいでしょうか。

歩いてみると良くわかりますが、運河はまっすぐではありません。ゆるくカーブ

しています。

カーブしているほうが、歩いていても楽しいですよ。



その9

建物というのは、どこの地方でも同じというわけではありません。

その町、その地方によつて、雪が降るか降らないか、雨が多いか少ないか、海岸なのか、山の中なのか、どういふ産業があるか、どういふ文化なのか、などの理由で、建物の形、材料、デザインなどは変わってきます。

建物に、その地方の特徴があらわれるのはそのためだといつてもいいでしょう。

では、小樽でもっとも特徴のある建物は何でしょうか。

大づかみにいふと、石の建物です。中でも倉庫は特徴的です。

石造の倉庫は、小樽の人にとって、なじみ深いものです。

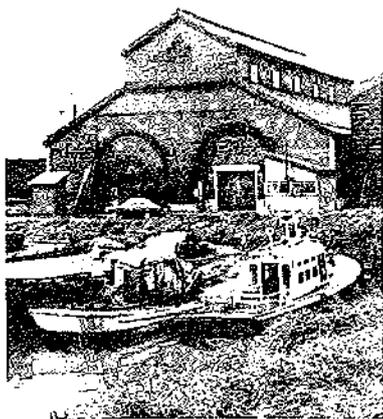
寒えにくいこと、暑さ寒さをやわらげる効果があること、石を使うよさはいろいろあります。

運河にそつて石造倉庫がたならんでい

るさまは、日本の近代建築群の三大景観の

一つに選ばれています。

石造倉庫



●とても美しい大家倉庫

おたるうんがけんきゅうこうぎ
小樽運河研究講座



●小樽運河研究講座のようす

その10



運河を残したほうがいいのか、道路にしてみましたほうがいいのか、これは大きな問題です。

いろいろな学者に意見をきいたり、よその町ではこういう問題をどうやって解決しているか、などをよく知って、しっかりと判断をしなければなりません。

そこで、小樽運河を守る会や、その他の団体が集まって、小樽運河研究講座という集まりをもっています。

研究講座というのは、お勉強をするための集まりだと考えていいでしょう。

みなさんの学校とちがうところは、校舎があるわけではないので、その時その時に場所を借りてすること、先生も生徒も大人だということでしょうか。

各地の大学の先生や評論家、よその町の助役さんなどをまねいて、お話をうかがい、みんなで話しあって、考えを深めて、よい解決のしかたをさがします。

今までの小樽運河研究講座のようは、本になって出版されています。

運河の全体をいっぺんに見ることはできませんが、歩くにつれて、けしきが、だんだんと変わってゆくのが、何といたらいでしょうか、そう、ゆったりした楽しさなんです。

どうして、こんなふうにかーブしているのでしょうか。

運河は、大正3年から工事をしはじめて、大正12年にでき上ったものです。

工事をした人が、わざとカーブさせたのだと、思いますか。

じつは、わざとではないのです。

あのカーブは、自然の海岸のカーブにそったものなのです。

色内大通りを知っていますか。

むかし、明治のはじめのころは、色内大通りのあたりには、ぼつんぼつんと漁師の家があるだけだったそうです。

じつは、小樽の海岸線は、色内大通りだったのです。

そのころの砂浜のカーブが、今の運河のカーブになっているのです。



明治20年から、港の荷あげなどがうまくいくように、海岸を埋め立てて、護岸をつくりました。この護岸が、今の運河の山側の護岸をわけます。

この埋め立て地ができると、つぎつぎ

に倉庫が建ちならびはじめました。

運河へいったら、良

く注意して見てもらいなさい。

山側にならんでいる

倉庫には、とても古いものがあります。

一番古いのは、明治22年に建てられた岡田倉庫です。

明治の終りころになると、港もほんじょうしてきて、運河をつくることになりました。

運河といえば、ふつうは陸地を削ってつくるものですが、小樽運河はそうではありません。

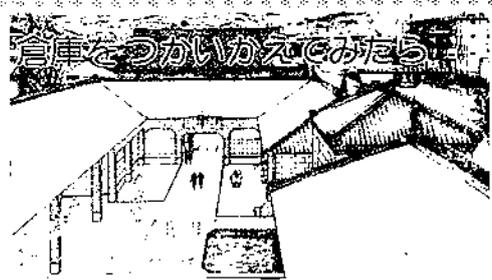
それまでの護岸から、あるはばの水路を残して、その先に新しい埋め立て地をつくったものです。

今の運河の港側、第三ふ頭の根もとのあたりや北海製糖の倉庫や工場のあたりが、大正12年にできた埋め立て地です。

だから、運河の山側は、港側にくらべて、古い建物が多いのです。

むかしは、港で荷あげをする時、船を岸壁につけるのではなく、いったん、はしけにつみかえて、はしけから荷あげをしていました。

だから運河のはばも、護岸の高さも、はしけにあわせてつくってあります。



小樽の港のころは、だんだん中央ふ頭や遊船の頭の方へ、ちがつちがついていきました。

運河その間の倉庫は、倉庫としての（ここは）わりと新しくなっています。

でも、あのちがつちの倉庫をこわしてしまつたのは、ちがつちのころです。でも、ちがつちのころをこわしてしまつたのは、ちがつちのころです。でも、ちがつちのころをこわしてしまつたのは、ちがつちのころです。

（ここは）わりと新しくなっています。

でも、あのちがつちの倉庫をこわしてしまつたのは、ちがつちのころです。でも、ちがつちのころをこわしてしまつたのは、ちがつちのころです。



港の中にイカリをおろした船から、荷をつみかえたはしけは、ひき船にひかれて運河に入っていきます。

そして、はしけから倉庫へは、人間の手ではこびこまれるのです。

そのころの小樽は、北海道のげんかんのようなものでしたから、いろんな荷物が集まってきました。

倉庫は荷物を安全にしまっておくところですから、一番こわいのは火事です。

火事から荷を守るために、倉庫は石で

つくられたのです。

小樽の町なかには、倉庫ばかりではなく、商店やビル、蔵、などの石づくりの建物がたくさんあります。

石造の建物がこれほどある町は、日本じゅうでも小樽だけです。

火に強いこと、石が手に入りやすかったこと、などありますが、小樽倉庫のシャチホコや、石造の商店のうきぼりになったかざりを見てもわかるように、小樽の人は、石造を誇りにしていました。

今でも、運河にそって石造倉庫が建ちならぶさまは「小樽の顔」といわれます。

運河から学ぶ 小樽の町の歴史を

今の運河は、やくにたっていないし、くさいから、もういらぬものだ、とい

う人もいます。

たしかに今は、はしけから倉庫へ荷あげすることはありません。

「やくにたたない」というのは「お金もつけににならない」という意味でなら、そうかも知れません。

しかし、世の中はお金だけで動くのではありません。

人にしんせつにすること、みんなたすけあうこと、よく学びよく遊ぶこと、こうした大事なことは、お金もつけのためにはありませんね。

よその町からきた人は、運河をみて、小樽を感じとっていきます。また、小樽の人は運河から、生きた歴史を学ぶことができます。これも大きく、やくにたっていることだといえます。

運河がくさいのは本当ですが、それは運河が悪いのではなくて、そうじをしないでほうっておいたせいです。

水べを大切にしよう

小樽には、古くから、お酒をつくる工場がたくさんありました。良い水がほうふにあってからです。今でも小樽の水はおいしいといわれています。

でも、川は私たちの目には見えなくなつたところが多いのです。池や沼も、埋め立ててしまつたところが多いです。

水べが、どんなやくに立つのかは、わかつていないことも多いのですが、水べを大切にしない町



くさいから、と鼻をつまんでいてはいけなものです。今からでも、きちんとそうじをしなければなりません。

自動車がぶえるのは いいとはかざらない

運河をつぶしてまで、道路をつくらなければならぬのでしょうか。

道路といつてもいろいろあります。今、計画されている「臨港線」という道路は、6車線、つまり、6台の自動車

がならんで走れる、とても大きな道路なのです。

小樽市は、昭和70年には、この道路を1日に6万台の自動車が行くだろう、と考えています。

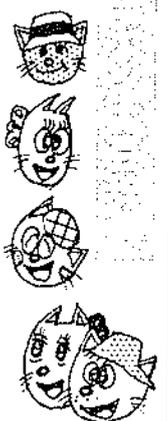
みなさんのお家には自動車がありますか。自動車はたしかに便利ですが、でもちよつと考えて見て下さい。

1台の自動車は便利ですが、6万台の自動車となると、話しはべつです。

みなさんの学校の校庭に、ぎつしりと自動車をならべたら、何台くらいになるでしょうか。2百台かな、3百台かな。

6万台の自動車が排気ガスをだしながら、走りまわるところを、思えばいてみてください。

交通事故もふえるでしょうね。道路のそばでは、話し声も聞こえないくらい、うるさいことでしょうね。



その11

小樽運河はとも有名です。テレビ局の人たちも、小樽の町をテレビに出す時には、まず、運河からうつすようになりまし

た。それというのも、運河がともよいところだから、でもあり、道路のためにこわされかねない、せとぎわにあるからです。

小樽では、小樽運河を守る会、や、小樽夢の街づくり実行委員会、などが、運河を守ろうとがんばっています。

よその町の人たちも、なんとか小樽運河を守りたい、と考えて、それぞれの団体をつくり、北海道や小樽市、日本の政府や国会に、はたらきかけています。

札幌には「小樽運河問題を考える会」、東京には「小樽運河を守る会」、旭川には「小樽運河問題を考える旭川の会」などがあります。

また、建築家のグループや、全国町並みゼミを主催している「全国町並み保存連盟」や「日本ナショナルトラスト」など、運河保存を応援する団体は、日本全国にたくさんあります。

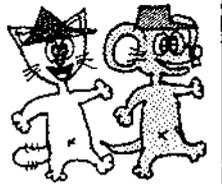
昭和55年10月6日には、東京都永田町の衆議院第二議員会館で、小樽運河を考える東京集会が開かれました。

小樽運河問題を考える会



小笠原克 小樽運河問題を考える会会長 札幌在住





日本の町は、ここ10数年の間に、どの町へいっても、コンクリートとアスファルトで、同じような町になってしまったところが多いのです。昔の建物では不便だ、とか、暗いとか、近代的でない、そう考えたから建てかえをしたのですが、いざ建てかえてみたら、昔の建物にはあった良さ、たとえば、その地方の文化とか歴史を反映したもの、などのない、冷たい感じのものになっていったのです。

そこで、昔の町並みを残したままで、より良い町づくりをしていこう、と考える人たちが毎年あつまって開いている大会が、「全国町並みゼミ」です。

昭和55年には小樽で開かれて、小樽運河とそのまわりの倉庫群を、どうしたら残せるか、という話し合いをしました。

せんくまちな 全国町並みゼミ



●第3回全国町並みゼミ小樽大会

道路をわたるのにも、よほどしんちうにしなければならなくなります。自動車があまりにふえることは、けっしていいことではないのです。もちろん、自動車がなくて、こまることも多いのですから、ぜんぶなくするわけにはいきません。

ようするに、ていどの問題ですね。

運河を残せ、といふ人たちのほうが多い

いろんな町のけいけんから、新しく道路をつくったり、広げたりすると、自動車の数が増えることがわかっていきます。べつの道路を走っていた自動車が、まわってくるだけではなくて、新しく自動車をかう人がふえるのです。

新しく道路をつけると、町なかのこんざつは、少しの間だけこんざつしなくなります。長い目で見ると、前よりもひどくなる人が多いのです。

そう考えると、新しく道路をつくることは、小樽の将来にとって、大きな問題です。みんな良く考えたいので、決めなければなりません。

小樽の人たちは、どういう意見を持っているのでしょうか。

右の下にある、円グラフは、小樽商大のお兄さんたちがしらべた、小樽の人た

ちの意見です。

運河を残す

ことにさんせいする人が、

46%です。

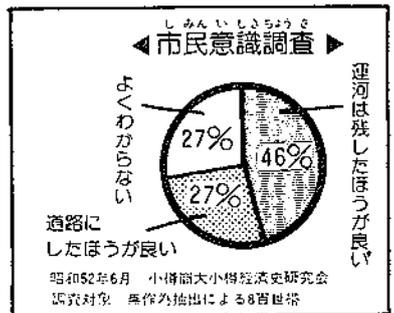
道路をつく

りましょうと

いう人が、

27%です。

あとの27%の人は、よくわからない、と答えています。運河を残したほうが良い、と考える人のほうが多いわけですね。



どっちがよいのかよく考えてみよう

みなさんの、お父さん、お母さんは、運河をどうしたらよいとお考えでしょうか。残すことにさんせいでしょうか。



「運河を守る会」などの人たちは、つぎのような、ていあんをしていきます。

- ① 運河はそうじをして、きれいにする。
- ② 道路は、よく考えて、もしどうしても

運河、もっとくわしく

いるのなら、運河をこわさないで、べつのところにつくる。

③ 運河のまわりは、みんなが安心して歩くことのできる、公園のようなものにしていこう。

運河をどうするか、を決めるのは、小樽の市民です。

日本じゅうの人たちが、小樽の市民はどういうふうはこの問題をきめるのだろう、と、じつと見ています。

国会でも、運河をどうするか、と問題になりました。

その時、文部大臣は「小樽の運河は大事なもののだから、ぜひ残すべきだ」とはつげんしました。

みなさんも、運河の良いところ悪いところ、新しい道路の良いところ悪いところ、などを考えあわせて、どうするの

が良いか、考えてみてください。

まず、先生やおうちの人の間に、運河はどういう使われ方を、てきたのか、運河つて、いつた、つたのか、そして、どう考え、ていったらよいのか。

くわしい話しを聞いてみたい人は、「小樽運河を守る会」へ、電話をしてください。

小樽運河を守る会の電話番は32ページにのっています。

小樽運河を守る会の電話番は32ページにのっています。

小樽運河を守る会の電話番は32ページにのっています。

小樽運河を守る会の電話番は32ページにのっています。



運河を守ろう!

紙芝居

僕らは運河を守りたい!

「たくさんの人たちに、運河のよさや小樽の町のことを、もっとよく知ってもらいたい。わかりやすくうったえる方法はないのだろうか?」

運河を守る運動をつづける若者たちはいつも思っていました。

そのうちに、運河を守る会のおじさんや若者は、

「そうだ! 紙芝居をつくって、小樽の町のあちこちで上演してまわる、とい

紙芝居は大好評!

ニャンコロ ニャン太の テーマソング ♪月



ニャンコロ ニャン太の 大冒険

ある日 ニャン太は 夢を覚めた
トカンのちねで 夢を見た
このお宝は 誰かある
誰の財宝は 誰がやる

◎くわえし

ある日 ニャン太は 電へ七を
衣箱から取り 電へ七を
もくもくか ずきこつた
ニャン太は 電へ七が自動車がいつまで

くわえし ニャン太は どうして この自動車がいつまで走っている 電へ 探検に出かけた。そして ニャン太は 電へ七をみつめてみよう

◎くわえし

ニャン太は ひとりで 町を歩く
カバンを かけて 町を歩く
牛車馬車 乗って 町を歩く
そして ニャン太は 運河をめぐった

◎くわえし

完成したのは、昭和55年10月23日のことでした

若者たちは、リヤカーに紙芝居をのせて、さっそうと町の中へと、出かけていきました。

さて、町の中へとくり出した、ニャン太の大冒険は、どこへいっても大人気でした。

若者に千円札をにぎらせる婦人もいれば、かまぼこをさし入れるお母さんもいました。

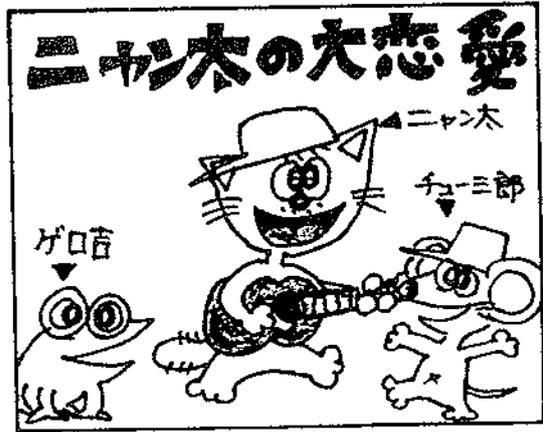
チビツ子たちは、テレビや漫画とほちがう紙芝居に興味をもったのか、「はやく、つづきを見たいよ!」



●紙芝居初演(昭和55年10月24日)

第2部をつくってきて! そのうち、若者たちは、チビツ子たちのリクエストに答えて、第2部「ニャン

太の大恋愛』、第3部『ニヤン太一家の大活躍』をつくることにしました。



●600コ以上売れたニヤン太パッチ(50円)



●'81ポートフェスティバル、チビッコ広場で

完成した紙芝居は、三角市場や妙見市場、丸井デパートの前や都通りなどで上

テレビに出演

昭和56年2月のウインターフェスティバルでは、花園西三丁目会の子供たちが「ネコのニヤン太」の雪像をつくり、7月の81ポートフェスティバルでは、ニヤン太一家が、大きな壁面になってかざられ、紙芝居も大好評でした。

雪像になつたニヤン太

活動資金のために作った「ニヤン太パッチ」(1コ50円)も、六百コ以上売れ紙芝居をみた人も、三千人をこえました。これからも、若者たちは、紙芝居をつづけていきます。みんなも、応えんしてくださいね。



●「ネコのニヤン太」の雪像

紙芝居アンケート



ニヤン太の紙芝居は、第1作「ニヤン太の大冒険」の完成した、昭和56年の10月以来、50回以上上演されてきました。紙芝居チームの皆さんは、

「いつたい、この紙芝居をみてくれた人たちは、どんな感想を感じたのかなさうか。」「そして、運河のことは、どう思っているのかなさうか。」「と尋ねるようになり、紙芝居やおまさんたちに、「紙芝居アンケート」をこつて、感想をきいてみることにしました。

このアンケートは、昭和56年2月1日に長崎屋一階の大陣計の壁で、書いてもらったものです。アンケートに答えてくれた人は、全部で55人でした。

Q1 紙芝居アンケート、今日の紙芝居は、おもしろいですか？

- はい.....40人
- いいえ.....1人
- わからない.....14人

Q2 小樽の町は、好きですか？

- はい.....51人
- いいえ.....4人

Q3 運河は、好きですか？

- はい.....50人
- いいえ.....4人
- わからない.....1人

Q4 運河のあたりは、道路ができてあなたも、それを運河とよびますか？

- はい.....15人
- いいえ.....34人
- わからない.....6人

Q5 今日の紙芝居について、ご意見

- ♥ 思いをおねがいします。(38人、女)
- ♥ 楽しい人たちが、このおもしろいことをつづけてほしい。(38人、女)
- ♥ 紙芝居の感想を、おまさんに書いてほしい。(37人、女)
- ♥ 小樽の町は、好きです。(51人、男)
- ♥ 運河は、好きです。(50人、男)
- ♥ あなたは、それを運河とよびますか？(15人、男)
- ♥ 今日の紙芝居について、ご意見(34人、男)
- ♥ 小樽の町は、好きですか？(51人、男)
- ♥ 運河は、好きですか？(50人、男)
- ♥ あなたは、それを運河とよびますか？(15人、男)
- ♥ 今日の紙芝居について、ご意見(34人、男)
- ♥ 紙芝居のおもしろいところを、おまさんに書いてほしい。(38人、女)
- ♥ 紙芝居の感想を、おまさんに書いてほしい。(38人、女)
- ♥ 紙芝居の感想を、おまさんに書いてほしい。(37人、女)

♥みなさんへ◆

みなさん、ニヤン太の紙芝居をみて、どんなことをかんじましたか。

ニヤン太やミヤ子さん、チュー三郎がすきになりましたか？

この紙芝居で、みなさんに知ってもらいたかったことは、小樽の町は、運河や、石造倉庫群など、何ものにもかえることのできない、大切な財産をもっているということですよ。

そして、この財産を、今、なくしてしまふことは、小樽の将来に、大きなマイ

お父さん、お母さんにも、この紙芝居の本を読んでいただけたでしょうか。
なるべくわかりやすいものと編集にのぞきましたが、子供達には少し難しかったかもしれせん。でも、これが限界でした。
この紙芝居は、少しでも多くの人達に運河のことをわかってもらいたい、そして保存運動の輪を少しでも大きくしていきたいと願ってはじめてたのです。
しかし、休日を返上してリヤカーを引っ張り、町の中で紙芝居を続けていくという事は、思ったほど楽なことではありませんでした。
第一部完成以来、50回以上もの上演を重ねて、さえ三千人の人達にみてもらったのがやっとでした。

ナスとなるのです。

そうですね。みなさんが、おとなになるころ、小樽の町は、今以上に、さびれてしまいかもしれないのです。

全国の人たちから注目されている小樽運河を、大切に残して、うまく使っていくという事は、小樽の町にとって、とても大事な事なんです。

てがみ 手紙をたのしむ

さて、ニヤン太の紙芝居は、第3部で、今のところは、おしまいです。

しかし、これで完結したわけではありせん。物語は、第4部で結末をむかえ

その間にも小樽運河は、埋め立ての方向にむかって着々と進んでいます。早ければ、ここ1、2年の間に埋め立ての工事がはじまってしまいかもしれません。この本を編集しようと思いたったのも、そんな切迫した事情が大きかったのです。

ところで、小樽市民は運河問題にどんな意識をもっているのでしょうか？
詳細な市民意識調査は、ここ数年行なわれていませんが、小樽市民は決して、運河埋め立てには合意していないように思われます。
僕らが街頭で紙芝居をやった時の手ごたえ、また、ピラマキや署名集めで街頭に立った時など、運河保存を望む多くの熱い声を聞いてきました。

埋め立ての工事がかかる前に、今一度、小樽市民の意識調査をしてみる必要があるのではないのでしょうか。
水辺を埋め立てて発展した都市はありません。ましてや、小樽運河は、歴史的な文化遺産として価値

るのです。

みなさんも、第4部のストーリーを考えてみてください。

そして、とてもいい物語ができあがったら、手紙にかいてください。

また、この本をみてかんじたことや、運河についておもっていることを、手紙にかいてみてください。

みなさんのお手紙を、まっています。

紙芝居チーム

（お手紙のあてまき）

〒047 小樽市花園4の3の12

中 一夫

この本は、金も力もない僕らの願いを込めてつくったものです。できるだけ多くの人に読んでもらいたいと、採算抜きで定価をつきました。この紙芝居を通じて、少しでも多くの人達と手を握ってあげたいと思います。

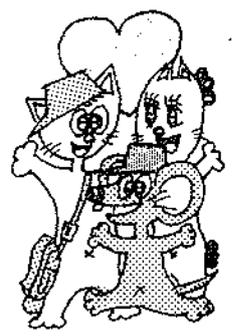
まだ、運河は埋められていないのです。今からでも、小さな力を寄せあって運河保存運動を進めていけば、きっと、運河を守ることができるとにちがいありません。

今一度、僕らと一緒に声を上げませんか

小樽運河を守る会、そして紙芝居チームは、これからも運動を続けていきます。

どうか、小樽運河が埋め立てられず、このようにご協力をお願いいたします。

紙芝居チーム 中 一夫



夢 希望 愛 そして 運河

ニヤン太は運河が大好き

（発行日） 昭和56年1月20日

（定価） 300円（税別） 400円

（発行編集人） 中一夫

（スタッフ） 青藤友美恵 北村昌男

（協力） 中一夫 志土公典

（発行所） 小樽運河を守る会

（印刷） 米沢印刷製本

（連絡先）

◎本誌及び紙芝居に関して

〒047 小樽市花園4の3の12

中一夫

☎（0134）3316063

（夜8時まで）

◎小樽運河を守る会

会長 佐々木隆美

〒047 小樽市松ヶ枝2の5の33

☎（0134）2316377

事務局長 増田文雄

〒047 小樽市長橋3の18の26

☎（0134）2256661

小樽運河を守る会の本と絵はがき

第1期小樽運河研究講座記録

昭和53年12月から、昭和54年の2月まで、全10回にわたって開かれた、小樽運河研究講座の記録集です

講師は、倉本聡など
全26名
七百八十円

第2期小樽運河研究講座記録

昭和55年2月28日から、4月19日まで、全10回の小樽運河研究講座の記録集です

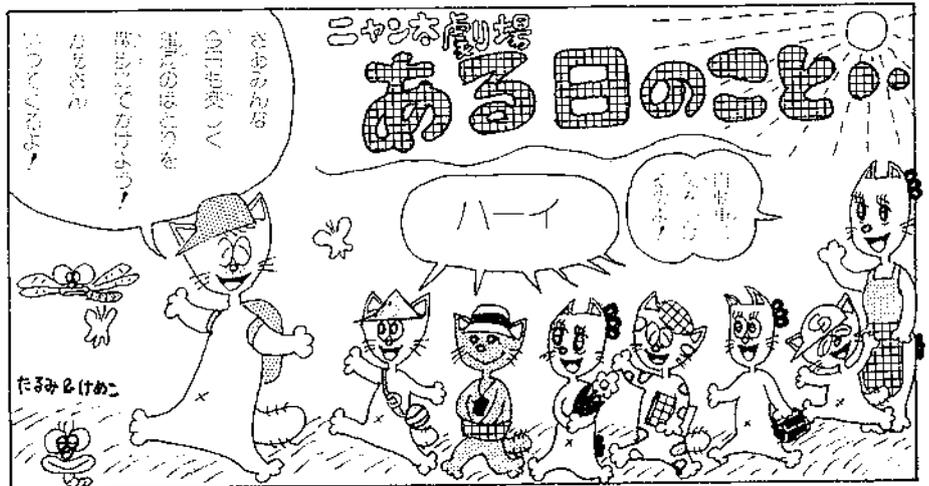
交通・環境の研究家などの、内容のある講義録です
千円

運河を埋めるな

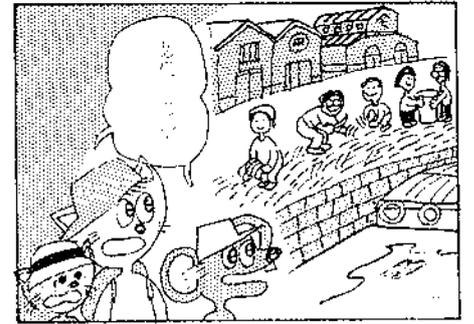
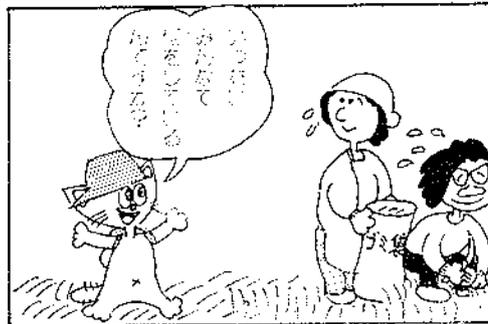
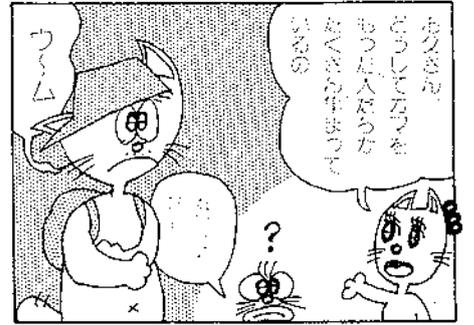
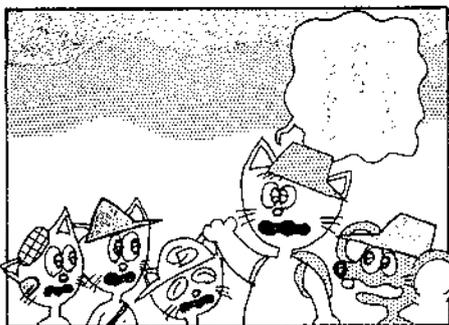
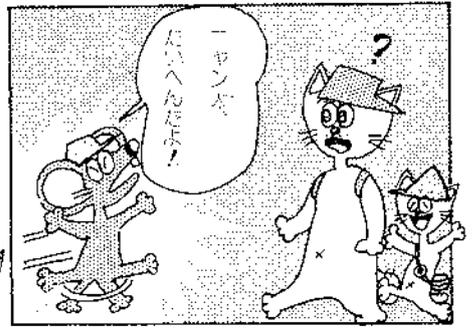
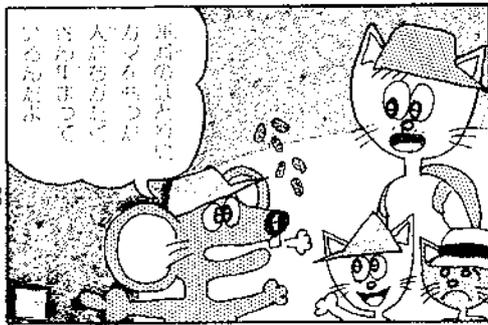
小樽運河の保存をめざし、全国各地から集まった3394通の意見書の中から、約200通の意見書を採り上げたものです
千円

森本三郎 絵はがき

小樽のおしどり画家として有名な、森本三郎さんのデッサンによる、6枚組の絵はがき
博物館、色内大通り、小樽運河など
三百円



うんが
運河をきれいにしよう!
小樽運河を守る会と、小樽市の街づくり実行委員会は、作らぬ運河のほとりの草刈りとゴミひろいをしています。
みなさんもいつしよに、おんぼろさんうんがをしませんか!
(連絡先) 喫茶メリーコーン
☎32 2236



ニヤン太は運河が大好き

紙芝居の本

〈発行所〉小樽運河を守る会

なまえ

